

京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト
 「リバイビング・ニュータウン：住民主体のコミュニティ再活性化にむけた研究」

日時：2011年7月9日（土）13：00－16：30
 会場：京都文教大学 指月ホール

2011年度第1回研究会
 「心のバリアフリーからはじまる『まちづくり』：
 愛知県の2つのニュータウンにおける実践報告」

<プログラム>

- 挨拶・趣旨説明 杉本 星子（京都文教大学人間学部文化人類学科教授）
 報告1 「外国人支援から地域づくりへ」
 楓原 和子さん（NPO法人保見ヶ丘国際交流センター代表理事）
 報告2 「高蔵寺ニュータウンのまちづくりと障がい児の未来をクリエイトするNPO活動」
 治郎丸慶子さん（NPO法人まちのエキスパネット代表）
 総合司会 西川 祐子（京都文教大学人間学研究所客員研究員）

<報告者プロフィール>

楓原 和子さん

- 1984年 豊田市保見団地に入居。
 1990年 子どもが幼稚園に入園し、地域の重要性を考え始め、母の会の役員を務める。小学校・中学校・高校でPTAの役員を務める。
 1995年 保見中学校の外国人生徒のためのボランティアティーチャーに応募。外国籍児童生徒がどの言語で学習すれば良いのか悩む姿を知る。
 1998年 保見ヶ丘日本語教室に参加。
 1999年 保見ヶ丘国際交流センター設立準備会事務局長として活動。
 2002年～NPO法人保見ヶ丘国際交流センター代表理事、現在に至る。
 2006年～2008年 保見ヶ丘公団自治区副区長、豊田市多文化推進協議会委員として現在に至る。

治郎丸慶子さん

- 1981年 高蔵寺ニュータウン入居
 1998年 3番目の子どもがダウン症と診断され、親の会をつくる。
 2000年 生き辛さを感じる親の子育て支援活動を開始。
 2002年 活動を法人化。高蔵寺ニュータウンセンター開発(株)の支援を受け、ニュータウンのセンター地区に拠点をつくる。
 2007年 障がい児の未来を考え、地域が幸せになれば子どもたちも幸せになれると考え、まちづくりの視点からの福祉を企画し、「まちのエキスパネット」を法人化。現在、3つの児童デイサービスを立ち上げ、高蔵寺にフォークジャンボリーやニュータウンの夏祭りなど、1万人以上の集客を成功させる祭りを立ち上げ、今年は4回目を迎える。

司会：ようこそお越しくださいました。シンポジウム「心のバリアフリーからはじまる『まちづくり』：愛知県の2つのニュータウンにおける実践報告」をはじめさせていただきます。最初にこのシンポジウムを主催する京都文教大学人間学研究所共同研究プロジェクト「リバイビング・ニュータウン：住民主体のコミュニティ再活性化にむけた研究」の代表、杉本星子から趣旨説明をいたします。司会は私西川祐子、人間学研究所客員研究員です。

<京都文教大学のニュータウン研究>

杉本：本日はよろしくお願ひいたします。京都市伏見区の向島ニュータウンと宇治市のグリーンタウン榎島という2つのニュータウンに隣接する本大学では、ニュータウンを対象とした共同研究を持続して行ってきました。最初は、文科省の科学研究費による共同研究「ニュータウンにおけるジェンダー変容」（2001年度～2003年度）、ついで本学人間学研究所の共同研究プロジェクトとして、「ニュータウンの未来像」（2003年度～2005年度）、「ニュータウンのある『まち』—地域における大学の役割に関する実践的研究」（2006年度～2008年度）、そしてこの「リバイビング・ニュータウン」（2010年度～）と共同研究を続けてきました。人間学研究所の一つの共同研究の期間は3年間ですので、現在の共同研究が4サイクル目、ということは、合計すると十年余りやってきたこととなります。

<ニュータウンと大学の接点を探した歲月、学生が企画したお祭りから新局面>

最初は、新しい社会のモデルみたいな形で建設されたニュータウンを舞台に何が展開しているかを、学びながら考えてみようというところから始まりました。それで何年か研究を積み重ねていくうちに、これは研究対象と研究者という関係で研究してはいけないテーマなのではないか、大学にいる私たち一人一人が地域で働く住民として、あるいは大学も地域の中の一つの存在として仲間に入れていただいて、そして一緒に地域の問題を考えていくということをしてゆく必要があるのではないか、そのときに大学

は何ができるんだろうかといったことを考えるようになりました。しかしニュータウンというのはある意味で周りから区切られた空間で、外からはとても入りにくいんです。大学はニュータウンのすぐ横にありながら、直接住民の方々と繋がるのがなかなかできませんでした、本当にそういう時間がとても長かったです。

ところが、ある時から学生たちが勝手にニュータウンへ入り込んでいくということが起きまして、その学生の繋がりを通して住民の方々と教員も、そして大学という組織も繋がっていくということが始まりました。とくに学生たちがニュータウンの方々と一緒に「向島・春の祭典」というお祭りを始めたんですけど、そのお祭りがきっかけになっていろんな人が、住民の方たち、大学、それからニュータウンに隣接した小中学校幼稚園が、お祭りを通して繋がっていくということが起きています。

そこで、私たちは今回の共同研究で、「リバイビング・ニュータウン」つまり、住民主体のコミュニティ再活性化に向けた研究というテーマを掲げました。大学も地域住民として入れていただき、そしていろんな施設の皆さんとも繋がりながらこの地域の社会問題を一緒に考えていくことができないだろうか、と考えたわけです。いろんな問題があるけれども、その問題を逆に手がかりにして、もう一辺まちを活性化していくような動きをつくることはできないだろうか、という方向で、去年から共同研究会を始めています。ニュータウンでは社会一般に先駆ける形で高齢化が進んでいます。また、向島ニュータウンには中国からの帰国した方々がもう長く居住されていますが、未だに異なる言語の間で生じる誤解やディスコミュニケーションの問題が完全には解決していません。高齢化問題、多文化共生問題など、そういったもろもろの問題に私たちはどう関わってゆけばよいのか。

<先進地域の事例から学ぶ>

実は私たちは、これまでニュータウンについて調査や研究交流をする中で、日本各地のニュータウンが同様の問題をかかえており、それぞれの住民が問題解決にむかって知恵と力を出し

合っているということに注目してきました。そこで今日は、地域の社会問題に地域住民が対応してきた先進地域である愛知県の保見団地、そして高蔵寺ニュータウンで活動してこられたお二人に来ていただくことにしました。今日は、お二人の報告をお聞きして、ディスカッションをする中で、私たちの地域の活動の次のステップが見えてくるような、ある方向性が見出せればいいなあと思っています。皆さんのお手元には資料が配布されていますので、その中に書きましたお二人の経歴、プロフィールをご覧ください。

最初にお話いただく保見団地の楓原和子さんは、いわゆる大規模団地でブラジル系の住民の方が増えていく中で、なかなか言葉が通じないという問題を少しでも解決するために日本語教室を始めるところから出発し、NPO保見ヶ丘国際交流センターを立ち上げられました。それを単なる語学教室ではなくて、ブラジル系の人たちも同じ住民として一緒にまちをつくっていくという、まちづくりの事業にまで展開させてゆかれた方です。

その次にお話をいただく治郎丸慶子さんは、高蔵寺ニュータウンの中で最初は障がいを持ったお母さんたちへの育児支援から始めて、やがて以前から高蔵寺でタウン誌をつくっておられた林さんという方と出会い、お二人の出会いから、それぞれの活動がまちづくり運動の本格的な展開するにいたる、エネルギッシュな活動をしておられます。

お二人は、同じ愛知県で活動してこられたのですが、実はお会いになるのは本日この場ではじめてだそうです。私たちはお二人の祭りとか、フォークジャンボリーとか、映画祭とか、楽しいことで人を集め、楽しむことを原動力にしてまちづくりを行う方針、また地域のさまざまな活動の中でいろんな方と出会い、人材を発掘していくという方法が、すごく楽しくていいなあと思っています。私たちの地域でも学生たちがお祭りを手がかりにして活動を始めていますけど、それをもっと展開してゆくにはどうすればよいか、今日はお二人のご報告をじっくりお聞きしながら、会場のみなさまとご一緒に考え

たいと思っております。楽しみです。よろしくお願いたします。

司会：それぞれ、ユニークな活動を続けてこられたお二人ですが、今日の報告そのものが自分史であり、自己紹介である、とおっしゃっていますので、このまますぐに報告に移っていただきます。ではまず保見団地から来てくださった楓原和子さんに、「外国人支援から地域づくりへ」と題して報告をしていただきます。

報告1：「外国人支援から地域づくりへ」

楓原 和子さん

(NPO法人保見ヶ丘国際交流センター代表理事)

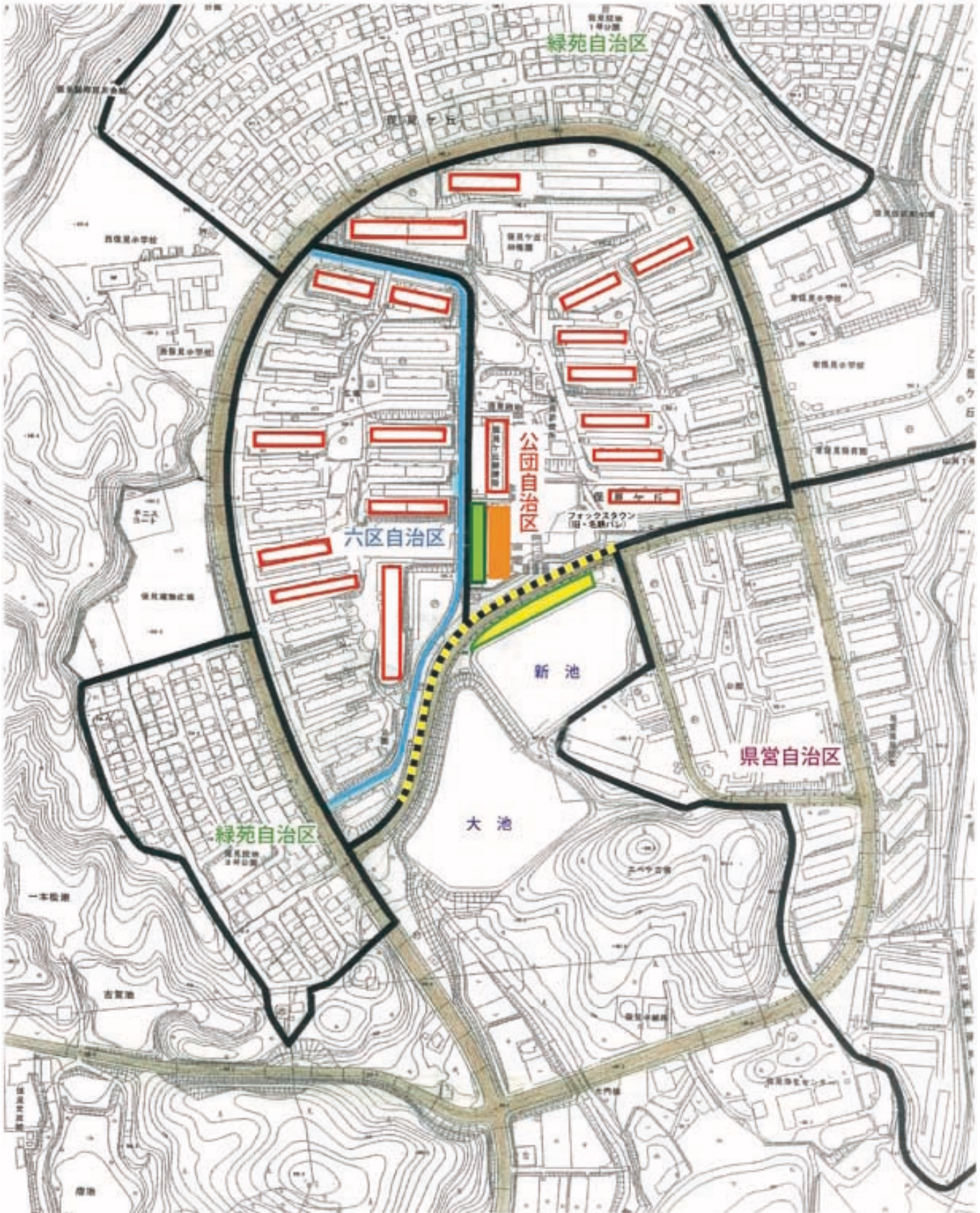
楓原：皆さん、こんにちは。愛知県豊田市の特定非営利活動法人保見ヶ丘国際交流センターの楓原和子と申します。まず私の住んでいる保見団地の概要からお話します。皆さん保見団地ってご存知でしょうか。何かとマスコミで賑わったこともあるまちです。豊田市の瀬戸市寄りにあります。豊田市の北西部の丘陵地帯を40年前くらいに開発して造られました。入居開始は1975年です。

お手元にも地図があるかと思いますが、保見団地には外周道路があって、保見団地と呼ばれるのは、道路にかこまれたこの一帯のことなんですね。で、県営住宅が25棟、そして都市再生機構の、今でも「公団」って私たちは言っているんですが、公団住宅が42棟、そして私鉄開発の戸建て住宅が540戸あります。私たちは、ここは大規模団地ですって言うんですが、人口はピーク時で1万1千人くらいなので向島ニュータウンの半分くらいですかね。

<自治区>

豊田市では自治会のことを自治区って言います。私はこの報告のなかでも以後、自治区と言いつつ、自治会長さんを区長さんと呼びながらお話をさせていただきます。先にふれました県営住宅エリアを県営自治区と呼びます。公団住宅のエリアは、地図の右側が公団自治区、左側が六区自治区と呼ばれています。外周に位置する戸建住宅エリアが緑苑自治区です。つまり保見団地

- …賃貸棟
- …保見ヶ丘国際交流センターの入っている賃貸棟
- …クリスマスパーティーや「1日カフェ」を行う広場
- …かつてトラックの食材販売所やプレハブ小屋が建ったエリア
- …「ほみにおいでん」の会場となる道路



の中は4つの自治区に分かれています。入居形態なんですけど、県営は全て家族単位の賃貸棟ですね。で、公団住宅の方は分譲と賃貸が混在しています。私は公団自治区のエリアに住んでいますが、特に私の住んでいるエリアで言いますと、奇数棟が分譲棟で、偶数棟が賃貸棟ですね。分譲棟と賃貸棟とが混在しているってところに特徴があります。

地図を見ていただくと保育園とか幼稚園があり、小学校は地図の右端と左端に見えますが、東保見小学校、西保見小学校と2つあります。中心近く、ここが保見診療所ですね、内科と歯科があります。そして郵便局、スーパーマーケット、実はご覧頂いているのがちょっと古い地図なので名鉄パレになっていますが、今はフォックスタウンっていうブラジル系のお店になっています。ここにショッピングセンターがあって、この団地から少し出ますと以前は銀行がありました。銀行がありコンビニがあり、少しこの道を行くと交流館があり保見中学校があります。で、この辺一帯が保見地区と言われているんです。この辺りの住居の中にはエスニックストアがあります。私たちはそう呼んでますが、賃貸棟ですがお部屋の中を改装して、ブラジルの美容院とか、自国の惣菜店、服飾店などをなさっている方がいらっしゃいます。居住者にとっての利便性というか、生活面ではかなり充足している環境ではないかなと思っています。

<入居者数の推移>

入居者数の推移なんですけど、当初公団は2DKだったんです。六畳のお部屋に六畳のダイニングキッチンと四畳半の2DKでした。で、それが狭いと人気が無くて、入居者が少なくて、保見団地は最初、幽霊団地として始まったということです。これでは売れないということで、壁をぶち抜いて2戸を1戸にしました。そこから入居者、主に日本人の入居者が激増しました。私も1984年に入居いたしました。外国人住民の入居は1980年代の後半、公団、当時は都市再生機構ですね、そちらが企業の社宅契約を認めたことから日本企業の社宅もありますし、日系外国人の人材派遣会社の社宅契約も増加して、激

増という形で人口が増えました。ピーク時の住民数は1万1千名となりました。

保見団地の近くに新しくできた戸建の分譲のエリアがあるんですけども、その住民はほぼ日本人ばかりなんですけど、そこの方のお話を聞いても、それまでいろんなところに住んでいた人たちが入居するわけで、一時的には入居ルールとかマナーとかが混乱した。学校にも混乱があったと聞きました。すると保見の場合はそれにプラス言葉の違いがあるので、混乱が長引いただけなんだなあと思っているんですけど、未だにやはり、ちょっと引きずっています。

で、当時の混乱の主な原因としてですね、言葉の違いから情報が本当に伝わらないという問題がありました。情報っていうのは欲しい人がタイムリーに目の前にある情報しか掴まないんですけど、そのうえ言葉の違いがあると、ますます上手く伝わらない。で、文化や習慣の違いからの問題もあります。ゴミ出しルールですとか、駐車マナーですね。それと車や音楽、話声などの騒音等々のトラブルが表面化してきました。

とくにブラジル出身の方たちは戸外で何かをするっていうのが好きなんです。バーベキューしたり、戸外に集まって、日本でいう井戸端会議のような談笑なんですけど、たむろしていて、日本人から見ると怖いと思われる。音楽もすごいボリュームで流されるものですから、隣近所にとっては騒音に聞こえます。また天気の良いときは団地内の小さな公園というか空き地でいろいろお話されるので、その声が夜なんかモロに入ってくるんですね、家の中に。それから戸外にいる時刻も夜遅いんですね、とっても。日本人社会では暗黙の了解があって、例えば9時までとか、それぞれが心得ていますが、そういう情報を知らないということで、夜中まで話し込まれてたりというのがありました。また、感情の表わし方がストレートで、注意した日本人の車に傷をつける等の報復行為も多く、うっかり注意できないというストレスがあります。

それとですね、人材派遣の社宅になっているためですかね、いろんな人がその1軒のところに住まれるんですけども、相性が悪いとかな

んとかで、同じ社宅同士でしょっちゅう住民が入れ替わるのですね。会社も把握しきれないという感じでした。近所の人にしてみると、なんかこう毎回毎回、顔の違った人が出入りするなあって感じで、本当に大丈夫なんだろうかっていう、そういう日本人に不安な印象を与えてしまった。というところが混乱の主な原因かなと思います。で、県営住宅や公団住宅の賃貸棟では特に、外国人住民の比率が高いんですね。そこで混乱が表面化してきました。

<地区ごと、棟ごとに違う住民感情>

日本人の住民感情が賃貸棟と分譲棟では違うんですけれども、私は分譲棟に住んでいるものですから、最初はいろいろ言われていることがあまり理解できなくて、他人の駐車スペースに駐車するとか、ゴミが上の部屋から降っている、あるいは駐車禁止のところに停まっているとか、そういうのがあんまり自分ではわからなかったんですね。そういうふうエリアごとですとか棟ごとに日本人の被害感情が違っていった。

とくに賃貸棟に住んでる日本人は、行政も自治区もなんにもしてくれないっていう失望感からその地を去る人が後を絶たないっていう事態になりました。本当に日本人住民は減少の一途です。ピーク時全体で1万1千名いた住民がですね、そのときは3割が外国籍住民と言われていたんですけれども、段々減りまして現在は社会情勢のせいもむろんあるのですが、団地全体の人口は8000名です。3000名減りました。日本人住民が4200名で、外国籍住民が3800名になっています。

で、外国籍住民の推移なんですけど、1990年、皆さんもご存知の入管法の改正があるんですけども、それ以前にも日系の人たちが入居していたんですけど、そのころは本当に2名とか3名とかっていう感じで、それも一世の方なので言語の問題が全然無かったんですね。読み書きもできる。お話もできる。日本語で通じるっていうので問題は無かったそうなんですけれども、入管法の改正と、一世の方たちが家族を呼び寄せるといったことが始まりました。さらに、社宅契約が始まったということで外国籍住民が激増

してゆきます。リーマンショックが2008年ですね、そこまでは外国籍住民の数が激増を続け、日本人は減少を続けるっていう形がずっと続きます。

2009年以降は実際に賃貸棟では、契約切りとかいろいろありましたので、本当に空き室が目立ちはじめ、市の統計上も人数的には減っています。外国籍住民も団地から減ったという統計が出ております。

けれども団地内で見ていると、団地内でも県営と公団で分かれて住んでいた家族が一軒に同居するようになるとか、親戚や友達を頼ってですね、他の団地から保見団地に入居する方たちがあるとか、私も実際見たんですけども、人数が増えておそらく一軒の家に住みきれなくて、2週間くらいでしたけど庭にテントを張っていましたね。保見団地の場合は、空き部屋が目立つ一方で、外国籍住民の数は定かではない。私たちは市の統計よりもいつも多いんじゃないかなあとと思っています。

私の手持ちの統計は平成16年のものなんですけれども、豊田市にいるブラジル人6497名のうち保見団地にいらっしゃる方が3635名ということで、半数以上の方が保見団地にいるということになりますね。それから2008年までずっと増え続けているんですけれども、2008年の豊田市居住の外国籍住民7917名の内、保見団地居住が4036名です。4036名のブラジルの方が保見団地にいたということです。それから2010年、平成22年まで少しずつ減少し、22年には豊田市全体で6600名まで減っています。そして保見団地でも23年の4月現在で約3400人、3493人に減っています。統計上はそうなんですけど私たちはこの数字は定かではないと思っています。そういった中で私たちの活動があったわけですけども。

<交流館の日本語教室、もう一つの日本語教室>

1990年から激増した外国人住民に対して、豊田市に、豊田市国際交流協会っていうのがあるんです。市の外郭団体です。そちらの方と自治区の役員さんがちょっとこれはなんとかしないといけないということで、1991年に近くの交流

館で日本語教室を開かれたんですね。でも交流館の場合は1年で、あとは自主事業、交流館の外に出てやらなきゃいけないんですね。交流館で続けるってわけにはいかないというルールがあって、2年目はこちらの六区自治区の集会所に日本語教室を移してやられたんですが、何ヶ月ともたないで閉鎖されてしまった。で、その間私たちが始める1998年まで何のサポートも行われなかった。子どもたちへのサポートも何もなかったという空白期間があります。

私たちの日本語教室は1998年に大学の関係者の識字調査がきっかけでつくられました。開かれるときに中日新聞に載ったんですが、私は2回目からそちらに飛び込みました。当時はまだ、外国籍住民に対して行政的な支援も何もありませんでした。市のお知らせですとか、公共料金のお知らせや案内等が日本語のまま、まだ多言語化されていなかったの、それらが全部、日本語教室に持ち込まれ、日本語教室には市役所からの通知、公共料金のお知らせ、申請書類などが持ち込まれて、まあ相談所みたいな形になってました。

<NPO保見ヶ丘国際交流センター>

そこで、これではちょっと、日本語教室の時間内でやるのが難しいねってことで保見ヶ丘国際交流センターを立ち上げようということになりました。当時は本当に日系外国人の立場が不安定という感じで、子どもの教育の相談ですとか、労働問題、社会保険に入れてもらえないなどという相談が持ち込まれて、私たちは社会保険事務所と市役所の国民健康保険の窓口を行ったり来たり、キャッチボールのボールみたいにあっち行ったりこっち行ったり、右往左往したときもあります。また労働災害ですね。そちらの方面の悩みもあって私たちも一生懸命、弁護士さんに相談に行ったりしたこともあります。国際交流センターとして人材派遣会社に掛け合おうという段階になって、そんなことをしたら、その会社に勤めているブラジル人が全員辞めさせられるというような噂を聞いて断念せざるを得なかったり、私たちには何もできないんだなあっていう悩みがありました。

私自身はやはり言葉がわからないっていうだけで同じ人間なのに不利益をこうむるってのがちょっと許せないなあって、そういう日本は嫌だなあっていう気持ちでした。私たちが知っている情報と同じ量の情報を流してあげたいな、と思っていました。今でも同じ気持ちです。で、まず日本語教室では優しい日本語で地域の情報を理解していただきたい。センターではちゃんと通訳翻訳をして、きちんとした情報を手にしていただきたいっていう、そういう考え方が今もずっと同じで変わっていません。

私たちのセンターの活動としては発足当初からですね、1人のカリスマ的なリーダーがぐいぐい引っ張っていきってというような活動の仕方ではなくて、1住民として、住民の1人1人の意識をゆっくり変えていきたいという草の根活動をずっと目指しています。今も目指していますし、最初からそう思っていましたので、地域を巻き込むということをいつも念頭において活動しています。

で、何かしようかなあと思うときはもう、いつも自治区の区長さんですとか役員さんに相談を持ちかけたり、今こんなこと考えているんだけどみたいな話を持っていくようにしていました。今もそうしています。

1人でできることも1人ではしない、というのが私たちの合言葉なので、区長さんちょっとこれこう思っているんだけど市役所に言ってくれませんかって感じで、必ず区長さんに、当時の地域の担当だった自治振興課と一緒にってもらい、その後何日かたってから私が出向いてまたさらにお話しするという形でしていました。現在は自治振興課から分かれて国際課っていうのができて、多文化関係のNPOである私たちは国際課を窓口にはしています。

<外国人支援から地域づくりへシフト>

NPOは、保見団地のことなら何であれ、どこにでも顔を出すっていうのが、出して顔を覚えてもらおう、私の顔を見たら、ああ保見団地には外国人がいるんだからちょっと翻訳しんとだめだなあって、こっちから翻訳してよとか、通訳つけてよっていうんじゃないかって、私の顔

を見たら、あ、しなきゃいけないんだって思ってもらえるように、どこの会合にもチャンスがあれば顔を出しました。で、愛知県に対しては、さすがに足繁く通う訳にはいかないので、もう保見団地のことを知っていただきたいっていう一念から、自分たちで事業を考えて助成金を貰うように、という形でアタックしました。

で、いろいろ活動している中で最初は本当に外国人支援だったと思うんですが、そのうち活動の中で外国人って本当にかわいそうな人なのか？ サポートしなきゃどうにもならない、かわいそうな人だろうか？ と思い始めました。特に日系ブラジル人の場合は自分の意思で日本に働きに来ていて、決してかわいそうな人ではない。ただ言葉がわからないから少しサポートが必要なのであって、同じ地域で暮らす住民じゃないかっていうふうに思い始めて、じゃあ言葉のわからない、日本語のわからない人たちとどうやって地域づくりをしていこうかなっていうのが、たんなる日本語教室だったところからセンターを立ち上げて、で、さらに現在は外国人支援から地域づくりへシフトしてきました。考えが少しずつ変わってきました。同時に日系外国籍住民も単なる出稼ぎではなく、日本に定住する意思を持つ人たちが多くなり、旅行者感覚から、地域に住む人に変化してきました。今では、一方的な地域づくりではなく、お互いの意思が反映できる地域づくりを目指したいと思っています。

<私たちの活動成果ーその1. 本音トークからゴミフェンスボックスが生まれる>

これは、すべての人が住みやすい地域づくりを目指して2003年頃から始めたことなんですが。当時、外国人が急に増えたまち、ってことでマスコミでも取り上げられたりして有名になったんですね。で、いろんなところから区長さんと一緒に来てお話を聞かせてくださいっていわれたことがありました。シンポジウムなんかに呼んでいただきまして、で、お話をさせていただいたんですが、特に区長さんたちがですね、お話された後に、「個人的に言うんだったら、もうこんなことでは済まないんだけど、本音で言え

ば、もっと言いたいことがたくさんあるのだけれど、やっぱりシンポジウムのような公の席でそこまで言えないしなあ」と、いつもそう言われました。その言葉が私はすごく気になって、やっぱり本音言わないと社会に訴えることもできないし、内輪でのグチで終わってしまうんじゃないっていう気持ちがあって、じゃあ本音トークしましょうか、ということでこの事業を思いつきました。

外国人集住地域意見交換会っていうんですけども、今外国人集住都市会議がありますよね、それよりもうちのほうがネーミングは古いんです（笑）。そういうのをしました。6地域9自治会と、6つのNPOってというのが連携しました。最初は自治会役員さんばかり集まってもらったんですね。外国人が集住しているところの役員さんに集まってもらって本当のところはどうなのよっていう話をしてもらいました。そこで、市営住宅、県営住宅、公団住宅の自治会役員が、集まったんですけど、やっぱりどこでも同様のことが起きてました。賃貸住宅の家主、大家さんが違っても皆同じことが起きているんだっていうので、じゃあいっぺんに声を上げましょうよっていうことで愛知県ですとか、いろんなところに言いに行ったんですね。

それからいつもは他のところからこちらにお呼びして、保見団地で会議を開いてたんですが、たまにはちょっとこちらから出かけてみませんかっていうことで、名古屋市の港区ってところの九番団地に出かけました。そちらは都市再生機構の賃貸住宅ばかりなんですね。そこで話し合いしたんですけども、私、そのときの話し合いそのものよりもゴミステーションを見ると、全部がフェンスで囲ってあったんですね。同じ都市再生機構なのに、なんでこんなことができるんだろう。私たちのところはステーションにコンテナだけ置いて裸です。なので、毎日皆さんがゴミを捨てますよね。パワーポイントの写真をお見せすると、こんな状態でした。ひょっとしたらこれはまだ良いほうかもしれません。もう本当にこんな状態でカラスは来るわ、猫が来るわ、ってもう、フェンスからゴミが垂れ下がってる、溢れて垂れ下がっている状態な

んですね。

ところが九番団地では、きちんと全部フェンスで囲ってあって、なんでこんなことができるんだらうって思いながら自分の公団自治区に帰ってきました。私その時ちょうど、公団自治区で副区長をしてたんです。もう手っ取り早く活動を知ってもらうにはこれしかないと思って自治区の役員になったんですけど、そのときちょうど副区長をしてましたので、自治会に帰って、九番団地のゴミステーションの写真を見せました。うちのゴミステーションの写真と九番団地のゴミステーションの写真見せて、これも同じ都市再生機構だよって話をしました。そして皆もうびっくりしてこれはもうなんとかしんといかんということで、隣の六区自治区も都市再生機構なので、こちらの六区自治区の区長さん、役員さんも呼んで、共同で都市再生機構と交渉しました。ちょうど整備公団から都市再生機構に、つまり民間になる変化の狭間の時期だったんですね。それでお金も出しやすかったということで、タイミングが良かったのでしょう、2千万円をぼんと出してきて、賃貸棟のゴミステーションを全部フェンスで囲みました。これが私たちのNPOとしての活動の中で今のところ一番大きな成果です。で、今、日本語教室をはじめセンターの事業の一部が豊田市の委託事業になっているんですが、おそらくこのときの成果もあって、そうなったのかなって、今思っています。以前はこんな状態でフェンスが無かったので、毎日毎日ゴミを捨てるので、私も捨ててましたが、収集日の前はとんでもない状態になっていました。さて、このままだと報告を持ち時間内に終わらせることができそうにないので、ここから石川さんに助けていただきたいのですけれど。

石川：京都文教大学人間学研究所客員研究員の石川真作と申します。研究員としてここにいると同時に実は、保見ヶ丘国際交流センターでボランティアをしております。これ以降は私の質問に楓原さんが答える、という形ですすめたいと思います。私も豊田市に住んでいるのでよく知ってるんですが、保見団地っていうと、「ゴ

ミ団地」って言われて、そのことで有名でした。当時言われていたのが、外国人の方が増えてきたからゴミ出しのルールがめちゃくちゃになってきて、ゴミが溢れているんだってことでした。そんなことがまことしやかに言われていたんですけど、そういう解釈は正しかったのだろうか。本気でこういうふうに取り組めば、なんとかなるんだということがわかって、このゴミの一件と言うのが1つの象徴的な事例になって、外国籍の住民と日本人住民とが一緒にいろんなことができるんじゃないかということが意識に登ってきた瞬間だったのだと思います。

<活動成果その2.「ひとくち会話集」の配布>

石川：その他にもいろいろセンターの事業がありまして、例えばですね、2002年に「日本語・ポルトガル語ひとくち会話」の配布という、これは県の事業としてですか。

楓原：ええと、市でもやっていました。今日お持ちしてみなさまに見ていただいているのは、私たちが保見ヶ丘四自治区と保見ヶ丘国際交流センター作、ということで作ったポケット版です。

石川：これはどういう経緯でつくられたものなのでしょうか。

楓原：外国人の方は顔を覚えただけですごく素敵に挨拶してくださるんですね。歩いてて目と目が合っただけでニコって笑って「ボンジア」とかって言ってくれるんです。反対に日本人は知ってる人にしか挨拶しません。ちょっと挨拶されると、えっとあの人誰だっけな、と考え込むような感じなんです。ところがブラジルの方は本当に素敵な挨拶を交わしてくださる。日本人も、例えば山で出会った登山者同士ならすてきな挨拶ができるんだから、名前は知らないけれども顔を知っている外国人と挨拶くらいできたらいいなあってことで、まあ発端はそれなんです。そういう気持ちなんですね。それで「おはよう＝ボンジア」っていうので、おはようの上にローマ字でOHAYOUってローマ字表記が書いてあります。でBom Diaの上にはカタカナ表記でボンジア。これもある区長さんの発案なんです。アルファベットだけ書かれてもどうや

って読んでいいかわからないから、カタカナ振ってくれておっしゃって、こういうふうなもの。最初はA4の1枚で、例えばこのフレーズを書いて下に、もっと挨拶しましょうよって、ブラジル人はとても素敵な挨拶をしてくれますよとか、そういうふうなちょっとしたコメント付で、全戸に配布しました。

で、その後10回くらい出した後、じゃあこれを1冊にまとめたらどうだろうってことで、ポケットサイズにしました。その後ですね、挨拶だけではなくて、防災のときに火事だとか危ないっていうひとくち会話集も出しました。そんな形で今もこの事業は引き継いでいて、保見ヶ丘日本語教室のことを、保見ヶ丘とアミーゴを合わせて「ホミーゴ」というんですけど、『ホミーゴ・ニュース』の下の方には必ず「ひとくち会話」が載るっていう形を出しています。

石川：まず、どう挨拶していいのかわからないですよね。ですからまずは声をかけられる。声をかけるためにはホミーゴがポケットに入っていれば、なんだったってパッと開けて、あ、そっかって言える。きっかけができれば少し何か交流ができるんじゃないかという意図があります。

<場面によって必要となる日本語>

石川：実はですね、保見団地に住んでるブラジル人の方々のなかで日本語を学びたいっていう方たちの比率は決して高くはないんですね。で、日本語教室はどういうところから日本語を学んでもらいたって考えられたのですか。

楓原：えっとですね、私は専門的に、学問として学んだわけではなくて本当に自分の体感からはじめたのですが、やっぱり日本で暮らすその人にとって日本語が必要なんじゃないだろうかって思うんですね。皆さん生活の中で、いつでもどこでも24時間通訳とか翻訳者とかがいるってわけじゃないですよね。だから少しでも日本語を理解していただければいいなあと思うのです。日本語ができれば、例えば子どもの教育でしたら学校の先生とやっぱり自分で直接に話すことができる。また病気になったとき自分の口から医者に症状を訴えることができる。日本語

でもただの「痛い！」でもいろんな痛みがありますよね。そんなことでも自分の気持ちで訴えることができると思うんです。それで保見団地の場合はフィフティ・フィフティくらい、日本人と外国人の人口割合が大雑把に言えばそれくらいなので、日常的にはもうほとんど日本語は必要ではないんですね。日本語なしで暮らすことができる。けれどもやっぱり自分が一人になったとき、個別の対応は場面によってやっぱりその国の言葉が必要じゃないかなって思っています。で、やはり必要な方には日本語を学んでいただきたいなあと思っています。

<日本語支援から、お祭をとおして、地域づくりへ>

石川：それで、そこから特に最近の活動なんですけれども、2010年の「1日カフェ」ですとか、それから2010年12月の「クリスマスパーティー」ですとか、それから、つい最近「ほみにおいでん」っていう、ちょっとしたお祭りをやりましたよね。こういった試みは日本語支援から地域づくりに繋がるという、その辺りはどういうふうに考えられますか。

楓原：そうですね。とにかく私、最近では地域づくりということしか頭にないほど打ち込んでいますが、もともとクリスマスパーティーっていうのは日本語教室で実施していたんです。それは日系の方の中に、やっぱり単身で来られてる方があって、ひとりのクリスマスは寂しい、なんかしてほしいっておっしゃって。「クリスマスパーティー」をしたんですね。ここの広場【地図参照】でいつもやるんですが、私たちのホミーゴ、日本語教室はここが拠点なんですね。で、この広場が最近では土曜日でも日曜日でも人っ子ひとりいないときがあるんです。本当にもう閑散として寂しい限りなんですけど、ここにやっぱり人を集めたい。人の流れを集めたいということで、日本語教室も毎週外で受付をしたり、外でピラを配ったりしています。で、クリスマスパーティーも今まで屋内でやっていたんですけども、もう屋外に出てやろうということで、イルミネーションを買って来たりとか、いろんなことで外に飾り付けをして、で、「ちょっと

買い物に来た人もおいで、おいで」っていう感じで呼び込んでやっています。今のところはこの広場の活性化を是非っていう思いでやっていて、「1日カフェ」もそういう形で、屋外で善哉出したりコーヒー出したりしてやっています。

<お祭り「ほみにおいでん」>

楓原：「ほみにおいでん」っていうのは、説明が難しいんですけど、もともと毎年豊田市のお祭りに「おいでんまつり」っていうのがあるんですね。今年も7月30日と31日にあるんですが、そこのまち踊りなんですけれど、参加できるグループは各地区で選ばれたグループしか出られないんですね。で、「ほみにおいでん」というのは、その選考会なんですけど、地域のお祭りとかと一緒にやって盛り上げる。そしてファイナルで豊田の「おいでんまつり」に繋げるという意味合いがあります。

石川：ヨサコイ形式のお祭りで、もともと盆踊りだったんですね。もともとは市街地の盆踊りだったのが段々拡大しました。グループをつかって申し込んで参加するっていう形だったんですけど、それが去年あたりから地域ごとに選考会をやるようになって、その選考会の1つを保見でやるってことになって、そこをなんとかこういう場にしたわけです。

楓原：そうですね、誘致しました。で、やっぱり保見の活性化に繋がりたいということで、市からやってみないかっていうお話をいただいて、すぐ飛びつきました。

石川：テープを流しましょうか。【祭りの様子の映像が流れる】最初の方にサンバ隊がでてるんですけど。

楓原：保見の特色を活かしてほしいということでサンバチームに参加していただきました。パワーポイントの写真は選考会で、審査員がどこかにいると思いますけれども。ステージで踊っています。これはあの、道路で踊っているところを審査していただいている。

石川：やっぱり道路でやるのが良い。

楓原：ファイナルは豊田市駅の駅前通りをずっとこういうふうにもち流してみたいにして踊るんですね。それで私たちもどうしてもこの道路で

踊っていただきたいということで通行止めの願いを出して道路で踊っていただいたんですが、他の地域、15会場で審査があるんですが、他のところはグラウンドですとか駐車場とか、そういったところで踊ってるんですが、今のところ保見だけが道路でやれたっていうことなんです【地図参照】。

石川：こちらをやるにあたって保見ヶ丘ブラジル人協会の方々の協力がありました。

<保見ヶ丘ブラジル人協会と連携>

楓原：保見ヶ丘ブラジル人協会っていうのは昨年の1月に発足しているんですが、そのときからセンターは、国際フェスタとかいろんな企画をブラジル人協会と協働でやっています。で、この「ひとくち会話集」もブラジル人協会の方たちに協力していただいています。スタッフの中に一緒に入っています。すいません、私「ほみにおいでん」の企画に集中して、只今ほとんど燃え尽き状態なんです（笑）。それと、地域でも途中経過ではいろいろ反対などあったんですよ。

実を言うとスーパーマーケットの南側道路上に、ピーク時ですかね、人口1万1千人の頃ですが、その頃ブラジルの食材店も全然なくて、ここにトラック販売所ができたんです。トラックを停めて販売されていた。その横にまた車を停めて、つぎつぎに、という状況【地図参照】。

石川：場所は、今パワーポイントで見た、サンバを踊っていた道路ですね。

楓原：同じ道路です。バスも通っていた道路なんですけど、それでバスは通らなくなりました。住民はブラジル人にバスを止められたと思うわけで、これではいけないということで、駐車場にトラックヤードを設け、トラック販売車だけ池の北側の駐車場に入れて、ここで販売できるようにっていうコーナーができました。ところが1人の人がそこにテントを建てたわけです。で、それを日本人はまあまあテントならいいかあ、みたいな感じで、テントならすぐ撤去できるからいいかあっていう形でそのままにしていたのが始まりで、たちまちプレハブ小屋までできて、ここが歓楽街みたいになって。

石川：それは何年頃でしたか。

楓原：私が活動初めてちょっと経ったくらいだったの。

石川：98、99年つまり10年くらい前。

楓原：で、ここがすごく繁盛したのは良いんですけども、まあよくないことも繁盛して、たえずドラッグの噂とか、アルコールにケンカに賭け事問題が絶えないところになってしまっ。で、一応撤去しようってことになって。もともと市の土地なので市にお返ししようって話が出てしまっ。2年くらい裁判をしましてです。で、ここがきれいになったんですね、去年。

石川：去年。

楓原：そうです去年。というか今年の初めくらいにやっときれいになって。で、私たちは豊田市から「おいでんまつり」参加の話をお願いしたときから、場所はここしかない、というふうに心に決めて。きれいになった保見団地を、怖いという評判でしか知らない皆さんに見ていただきたい、来ていただきたいということで、名前も「ほみにおいでん」そのものずばり。その名前にしました。で、ここの役員さんたちからは、「ここはきれいになったけど、このことはまだ触らんといてくれ」みたいな雰囲気があって、なかなかお許しが出なかったんですけど、それをちょっと頑張りまして。で、やっとお許しが出たという形でこの「ほみにおいでん」祭を実現したのです。祭当日は車も全部移動していただいて協力していただきました。で、警察からはこれ1回限りでやめてくれ、通行止めにするのはやめてくれって言われたんですけど、私たちは年に1回だけお願いしますという形で、来年も頑張りようかなあと思っています。

石川：それはあの、決してブラジル人の販売車を排除するとかいうことではなくて、まあ結局、不法占拠から始まってなんとなく来てしまったものをもう1回こう、一緒に協力して構築し直すという。

楓原：そうですね。一時期はエリア的に普通の家庭のブラジル人の方も近寄らないっていう場所になってしまっていたんですね。私たちの日本語教室の隣はブラジル食材店なんです。フォックスタウンというブラジルの業者さんなので、

だからブラジル食材店が無いということではないので、販売車によるエリア占拠はやめていただきました。

石川：あと何か言い残したことはございませんか。

＜これからやりたいことー日本人住民、外国籍住民、NPOボランティアの連携と融合＞

楓原：今日は本当に高蔵寺の方とか向島ニュータウンの方とかにいろいろ教えていただいて、私自身も地域づくりのことについてまだ発展途上にありますので、勉強させていただけたらなあと思います。あと保見団地はですね、地域住民と外国籍住民とその上に外から来ているNPOのボランティアの方たちが、互いに伴走状態にあって、なかなかこう、いろいろな連携がまだできていないんですね。ボランティアの中でも、私だけなんです、住民っていうのが。それでなんとかこの3つの層を繋げたいなあ、溶け合わせたいなあと思って、その方向で今後も活動していこうと思っています。また皆さんのお知恵を拝借させていただこうと思いますので、よろしく願いいたします。

司会：楓原さん、貴重なお話をありがとうございます。それから石川さんも、後半を対談形式にして盛り上げてくださってありがとうございます。石川さんに質問役をしていただいたのはとても良かったです。その続きを、今度は会場で聞いてくださった方々から質問を出していただき、楓原さんから、もっともっと豊富なお話を引き出していただけたらと思います。質問をどうぞ。

＜同じ人間としてのつきあい＞

出席者1：近くの向島市営住宅の車椅子使用者住宅でひとり暮らしをしています。今日は貴重なお話をありがとうございます。今日のお話の中でちょっと気づいたというか感じたところが。外国人支援の中でね、本当に困ったかわいそうなかかっていったらそうじゃなくて、文字が、言葉が通じないその困った部分だけをサポートすればいいんだって話があったと思うんですけど

ども、それは障がい者支援もそうなんですけど、困った部分だけサポートしてくれたら別にかわいそうな存在じゃないっていうのは、私も言い続けているんです。これは支援活動の中で結構定着している部分なのか、まだまだそこに向けて進んでいるのか、どんな感じでしょう。

楓原：今日は私の考えをお話しましたがけれども、それが全体的に広まっているかどうかというのは定かではないんですが。まだまだ、やっぱり外国人、とくに子どもの場合は親の働く日本へ、親の言うとおりに連れてこられてっていう、その子どもに対しては、かわいそうだからっていう対応があるかもしれないんですが。でも私は、かわいそうという視点では、サポートできないんじゃないかと思ってるんですね。こういう考え方が広まっているかどうかは私にはわかりません。私自身はそう思っているんですけども。

出席者1：常日頃からね、そこがなかなかこう伝わらない部分なので、もしかしてそこらへんが上手くいっている部分があって学ぶところとかあれば、障がい者運動の方でちょっと活用させてもらいたいなあって思ったのですが。活動していく中で段々とできていくということなんですかね。定着しているかどうかというのは統計的にも取れないだろうし、自分がそういう思いでやっていくことが大切っていうものですかね。

楓原：そういった考えが定着しているかどうかというふうに問われると、なんともお答えしようがないんですけども、私が知っている他の方たちを見ても、なんていうんですかね、過度の遠慮はしない。普通の人としての付き合いをされているんですね。例えば私ができないことを、できる方がちょっとサポートしてくれる。で、そういった感覚でのサポートは、私の知っている人は、別に私のグループに入っているわけじゃないんですけども、隣近所の方とははされてるんです、外国人の方とも。私はその延長でいいのかなっていうふうに、見てるんですけど。

出席者1：もう1点伺いたいことがあるんですけど。例えば、僕らがいろいろ社会に訴えて

いく中で、もっと障がい者を利用してほしいと訴えています。良い意味で利用してほしい、と結構言っているんですけど。もしかして次の治郎丸さんの報告にあるのかもしれないけれど、障がい者が障がい者ゆえにね、生きづらさゆえに、生きることをとことん楽しんでいるとかね。自分らしく生きようとして、すごくいきいきとした人が結構多くて、それをもっともっと社会に還元したいなあって、いろんな部分で思っているんですけど。例えば今の話の中にありましたが、外国人から素敵な笑顔で挨拶してもらえると、そういったもっとプラスの部分で、なんかこう活かしてみようかなあとかそういう思いというのは、何かあるんですかね。

楓原：個人的に言いますが、それはすごくあります。南米の方たちはものすごく陽気なんです。あの派遣切り以来ですね、このあいだの地震のあとも、6月いっぱい休みにになったりとか、いろいろあったんですよ。人材派遣会社に行っても、もう毎日が仕事休みだとかって言いながら、それでも毎日バーベキューしているんですね。あの精神構造はどうなんだろうってこちらが感心するくらい。でもお金が無いときは、どんな顔をしていてもお金が無いんですよ。そういうその気持ちが前向きなところは、本当に見習いたいなあって。どうしても日本人は内に引籠もりがちっていうふうになってしまうんですけど。本当に陽気です。そこは本当に見習いたいと思っています。

出席者1：ありがとうございます。

司会：次はどなたからの質問でしょう。手を挙げていただけるとありがたいのですがどうでしょうか。はい。

<保見ヶ丘ブラジル人協会と若い世代>

杉本：今は笑いながらお話をさせてますけれど、たぶんあのトラックヤードのあたりはすごい大変なことだったろうなと思います。

トラックヤードをきれいにする辺りのところで、保見ヶ丘ブラジル人協会と一緒に動いたりということがあったのかどうか。そのブラジル人協会がこれからどう進展するのか、そういう状況をちょっと伺いたいなと思いました。向島

ニュータウンは中国残留孤児とその家族の方々の入居からはじまって、中国系の方が多いのですが、最近はずでに在日二世の方たちが、日本語を使わない一世の方たちと私たちの間に入ってきて下さったりすることが始まっているんですけども、保見団地でもブラジル系の若い世代が地域に貢献し始めているのかなと。その辺りをちょっともう少し伺えればなあと思ひまして。

楓原：ブラジル人協会との繋がりという点では、NPOばかりではなくて自治区とも絡んでるんですね。4自治区合わせて保見ヶ丘パトロール隊っていうのをつくっているんですが、その中にブラジル人協会の方もメンバーとして入っていただいて、トラックヤードの中を赤い警棒を持って月に1回はパトロールしていました。でもブラジル人協会の方がブラジル人に何か働きかけるとか、そういうことはないんですね。というのは、私たちが言葉のできる方をつかまえて、あれ通訳してよ、これしたらだめって通訳してよっていうふうなことを頼むと、間に立たされたその人がお前はどっちの味方しとるんだ、というふうになってブラジルの人からも浮いてしまうっていう状態があるんで。私たちはとくにトラブルの場合の通訳は、団地に住む外国籍住民に頼まずに、ちゃんと行政から派遣されて来た人を使うっていうふうにしています。あれしちゃだめこれしちゃだめ、これ禁止あれ禁止っていう通訳は、していただかないようにしています。

で、若い人たちの協力があるかっていうのは、今本当に保見団地にいる方はどの年代の人も多いんですけど、やはり特に若い方たちは、うーん、日系人っていうよりも本当にブラジル人なんです。で、地域のことについての活動っていうのはほとんどないですね。お祭りのときとかそういうときは出てきますけど、まだまだ若い人たちはお客さん状態。働きに来てるだけって感じです。

<新世代の子どもたち>

司会：司会が質問したら本当はいけないんですけど、質問させてください。今お聞きしたお話の中に、1990年の入管法改正以前の入居者は、

ブラジルに移民なされた方がそのまま日本帰りの方たちだった、だから日常生活では言語的に問題がなかったっておっしゃっていました。ところが現在、入居している方は日系という言葉ではいえないくらいブラジル人である日系ブラジル二世の方たちである、とお聞きしたのですが、その1990年から今まで、もう20年以上あるわけですね。そうしたら次の世代、日系ブラジル人として豊田市に来た、自己認識としてはブラジルの日系二世の方たちの、その次の世代がすでに成長していると思うんですが。パワーポイントで拝見すると、サンバの踊りの所作が見事に美しい子どもさんたちが踊っています。姿勢や動作はあきらかに文化なので、あ、この小さい人たちは動きがすごくきれいなんでブラジル文化が身についている、と思ったりするんですけど。そうすると、この子どもたちをブラジル日系三世と呼ぶべきなのか、それとも、在日二世あるいは三世といったらいいのかわからなくなるという、ちょっと今までの概念でそんな簡単には言えない状況がすでに生まれていると思うんです。その最も若い世代の置かれた現在の状況と未来について、もう少し聞きたいなあと思ひました。

楓原：はい。すいません私、一世とか二世とか、三世とかいう数え方が、ちょっと頭の中が混乱してよくわからなくなってしまいました。あの、明らかに日本で生まれた人たちはいるんですね。日本の公立の学校に行ったりしている子どもたちがいるんですが、6～7年の間、日本語のサポートがなかったっていうお話をしたと思いますが、その頃の子どもたちっていうのは本当に大変だったんですね。その頃の子どもたちは、お父さんやお母さんとはまた違っているわけです。で、結局その時代、何もサポートを受けないで育ったっていうか、私たちが一緒に遊んだ子どもたちは今、ちょうど若いお母さんお父さんになって働き盛りで、まだ地域にたいしての働きかけはないですね。要は日本人の子どもも一緒ですね。うちの子もそうですが、20代くらいっていうのは、まだ全然、地域なんて関係ないっていう感じです。ただその子たちがもうちょっと上の年代になったとき、あと10年経った

ときに、ちょっと変わってくるのかなあって気はします。それも分譲とか戸建とか、そちらの方に行かれて、定住ですとか、永住ですとかっていう概念が生まれたときに、ちょっとは感じが変わってくるんじゃないか、と私はそれを期待しているんですが。

司会：ブラジル美容室がある、というお話がでしたが、美容室ってわりに社交場ってところがあるから、そうするとその美容室にはブラジル系の方たちばかりが集まるのか、そこに日本人住民も行ってちょっと違う髪形にしてみようといったことはないんでしょうか。

楓原：日本人はまず行きません。あの、賃貸棟の部屋の中をどうしてその、改装しちゃったのか私たちにもよくわからないのです。

司会：居住目的の入居しか許可しなかった公団住宅ですが、確かある時期から事業主の入居も法律的に可能になったように思います。ありがとうございます。次の質問の手が上がりました。

<賃貸、分譲、戸建、各エリアの意識のちがい>

出席者2：ちょっとお尋ねしたいんですけども、4自治区があるということで、集合住宅も賃貸と分譲に分かれていて、さらに戸建住宅エリアがあって、それらが合体して一つの地域をつくっているとしたら、京都でもそうだと思うんですけども、それぞれ住んでおられる階層が違うんですね。全体の人口がピーク時の1万1千人から8000人になって、日本人の住民が4200人と減っているといっても、一戸建て住宅の方は中々減らずに、県営とか公団住宅にお住みだった方の減り方がずいぶんと大きいんじゃないかというように推測させていただいたんですが、一点目はそのことに間違いがないか、お聞きしたいです。

楓原：そうです、おっしゃる通りです。賃貸から団地周辺の民間のアパートや分譲住宅に移られるっていうのが、比率的に最も多いですね。あとは分譲棟からも出て行かれる方が多くて、その後に入られるのが日系の方っていう形になっています。で、比率的にはグッと低いんですが、戸建てでも出て行かれた後には日系の方が入られる。

出席者2：ありがとうございます。その場合に、ニュータウンで持ち家と公団と公営がいわゆる混在している地域の自治会活動、地域づくりっていうのは、住民間の意識とか地域に対する思いとかにギャップがあったりすると思うのです。つまり一時的にそこにいるという方と、ずっとそこに住み続けたいって方の地域づくりへの思いっていうのはいろいろ違いがあるかもしれないなど。私たちもよくそれでぶつかってしまうんで、その辺りをまとめられていく上で、いろいろご苦労があったんじゃないかなと思いますので、ご苦労話とか、何かまちづくりのヒントになることがありましたら、お聞かせいただければと思います。よろしくお願いします。

楓原：苦労というよりも、もう悩みばかりなので。今おっしゃったように戸建エリアの自治会、自治区の加入率は100%です。県営のエリアはですね、県営は駐車場と一体になってるんですね。なので区民でないと駐車場を貸してあげないよ、ということがあるので、自治会費の未納者はいるにしても100%の加入率なんですね。で、こちらの6区自治区っていうのは、賃貸棟に比べて分譲棟が多い。自治区に入ってる方は約800戸。そのうち自治会に入っておられるのは440人から450人くらいです。私がいる自治区に関しては、賃貸棟が多いので800戸のうち自治区に加入しているのは250戸に満たないという形で、自治会がもう本当に風前の灯。で、6区自治区と公団自治区を合体したらどうかって意見も出てるんですけども。社宅になっている関係上、なかなか加入していただけないです。会社から区費を納入してもらったときもあるんですけども、不況の後、会社にお手紙を出すと、いやあそこはもう会社の寮じゃないからって、そのときだけ個人の名前に切り替わっているんですね。で、自治会に入っていないっていう状態で、自治会が風前の灯です。

司会：続けてご質問のほうをお願いします。

<保見団地の日系ブラジル人の国籍、永住権>

出席者3：今日のお話はいろいろ本当に勉強になりました。向島地域は、特に中国からの帰国者が多いんです。今のご報告と向島ニュータウ

ンの帰国者たちの社会とを比較しながら、まだ整理ができていないのですが、いくつか質問させていただきたいです。1つはブラジルの方は全員派遣社員ですか。どんなビザで来てるんですか。国籍は日本あるいはブラジルですか。ブラジル国籍の場合、永住権を持ってるんですか。彼らは永住したいんですか。それか、何年か働いたら帰国するんですか。おそらく永住する人はもっと日本文化を理解しようと、もっと住民たちと付き合っていきたい気持ちがおそらく強いでしょうね。もし数年間働いて帰国するのなら、まあ日本語を勉強しなくても良いという気持ちになるんじゃないかと。どんな身分ですか。もう1つは保見団地の外国人は全部ブラジルの方ですか。他の国籍の住民はほとんどいないってことですか。

楓原：日系の方たちは、全員人材派遣会社で働いていますが、派遣切りが問題になった時以降、直接雇用され正社員になった人もいます。が、日本人の正社員とは違う、差別されているという人もいます。国籍がブラジルの方たちですね。あの、永住権を持っている方たちはすごく多いんですよ。何年前からでしたっけ、簡単に永住権を取れるようになりましたね。そのときに手続きされた方がすごく多くて。でも日本に本当に永住するつもりで永住権を取っているかっていうと、そうじゃないんですね。簡単に取れたから取って、ブラジルと日本を行ったり来たりっていう状態です。保見団地の住民数約8000名のうち、外国籍住民が3800名で、その内の92%ぐらいがブラジル人です。後はペルー、アルゼンチン、最近では、中国人が多くなってきました。中国人はほとんど研修生です。

石川：ビザの категория がありまして。日系の方たちは categoria が違うんです。外国人扱いじゃない。ですから自動的に、ほぼ自動的にビザがとれ、永住できるっていう形になっているので、権利と意識の間はかなりギャップがあるってというのが実情です。

出席者3：実際の状況では、ほとんど永住権をとっているんですね。では今回の地震が無ければほとんど永住したかもしれない、ということですか。もし永住のつもりなら、日本社会や日

本文化をもっと勉強したい、理解しようと、日本の住民たちと交流したいという気持ちが強くなってくるんじゃないか。それが知りたいです。

<ブラジル人協会について>

もう1つですね「ブラジル人協会」にすごく興味があるんですが、それはブラジル人は全員加入するんですか。どんな役割を果たしているんですか。例えば事務所はありますか。彼らは定期的な活動をしていますか。例えば彼らは宗教活動しているんですか。そこに文化的なものの社会的なもので、ブラジルのものはありますか。全員、3000人、4000人のブラジル人をまとめて一緒に活動しているのか、どうか。どんな状況か教えていただけたらありがたいです。

楓原：ブラジル人協会についてなんですが、私が見ている限りでは、何て言うんですかね、1人の方の思いでつくられて、今のところその方の家族とその方のお友達っていう形です。だから団体の活動っていうのは、あまり見受けられないんですね。国際フェスタにしても何にしても、とりあえず保見ヶ丘国際交流センターで企画も全部立てて、助成金を取りに行っておいでとか、これに参加したら、みたいな話をしてるんですが、なかなか組織としての動きは見受けられない。何とかまとまってほしいんですけど、ブラジルの人たちは団体で何かするとかっていうのがないんですね。ひとつの目的のためにガッツと集まれるんですけど、それが終わったら、サッともういなくなるっていう形です。よろしいでしょうか。

出席者3：おもしろい話ですね。最後の質問です。宗教について。ブラジルから来ている方たち、しかも3000人4000人もいるので、例えば何々宗教とか何か活動はしていませんか。教会とか日本のお寺でとか、ブラジルはおそらくカトリックが中心ですよ。それなりの宗教活動はありますか。

<宗教活動について>

楓原：宗教活動っていうのはですね、例えば、日系の方かな、ブラジルの方かなって思われる方たちがよく広場に集まっているんですけど。

ータウンのまちづくりと障がい児の未来をクリエイトするNPO活動」と題してお話をいただきます。先ほどのお話と本当に上手く繋がりそうな予感がします。2つ目の報告にたいしても後ほど皆さんから、質問やご意見をお聞きしたいと思います。よろしく申し上げます。

報告2：「高蔵寺ニュータウンのまちづくりと障がい児の未来をクリエイトするNPO活動」

治郎丸慶子さん
(NPO法人まちのエキスパネット代表)

＜高蔵寺ニュータウンの紹介と私のまちづくり活動＞

治郎丸：皆様こんにちは。治郎丸慶子です。愛知県の春日井市、高蔵寺ニュータウンというところから来ました。

今日そちらからやってきまして京都駅を見ると、とても素敵なステーションなんです。圧倒されて、私はどう見ても観光客という感じであちこち行って、すごいです。また通り行く人の言葉が、ですね、あまりにも京都弁がきれいで、絶対、名古屋弁を出すまいと思ったんですけど、着いた瞬間「もうひゃー着いた」とつぶやいてしまいました。京都はとても素敵なまちだと思います。高蔵寺ニュータウンは京都とくらべれば歴史が無いまちなんです、しかし無いといえど、もうニュータウンがつくられて43年経ちました。

私は「まちづくり」に携わってまだ13年ぐらいなんです、私がまちづくりに関わってなぜ13年なのかというと、うちの息子が13歳なんです。三番目の子どもというか、女の子、男の子、男の子で、つまり次男ですね、その子が13歳で、私の活動が13年目ということでご想像していただけないかと思います。今日の題目は「高蔵寺ニュータウンのまちづくりと障がい児の未来をクリエイトするNPO活動」ちょっとかっこいい題をつけてみました。こういったことでまずお話を聞いていただこうと思うと、一生懸命に題名を考えるんですね。題名に約1日かけます。あとは半日で組み立てるっていう感じなんです。いちばん最後に、なぜこの

題名をつけたかっていうのがわかっていただけると、とっても嬉しいと思います。

パワーポイントのこの写真が高蔵寺ニュータウンですね、43年前、当時の日本住宅公団、今のURが「緑と太陽のまち」というキャッチフレーズで、このまちを売り出したんですね。名古屋圏に通う人たちの郊外のベッドタウンとして売り出して、当時とても人気の高い、全国からここに集まってきて、このまちに住みたいわってという都市計画でした。国のプロジェクトで、デザインも注目されたまちだったそうです。私はその当時は住んでおりませんが、そういったキャッチフレーズだったと聞いてます。それで今こんなふうに緑があったり、団地があったり、一戸建ても結構多いですね。8万人のまちが目標だったらしいんですけど、途中で5万人に目標が変わり今は4万7千人くらいだそうです。8つの、なんとか台、石尾台、高森台、中央台、岩成台、高座台、押沢台、玉野台、高森台に分かれておりまして、各台が1つのまち区ですね、それぞれの中に食品センターがあり、小さなモールがあって、団地があって、そういうまちが8つくらいあって、高蔵寺ニュータウン全体の真ん中、センター地区といわれるところに大きなショッピングモールがあって、そこにですね、郵便局から保健センターまで全てのものが全部そろっているという計画だったようです。真ん中に行けば何でもそろいますが、自分たちの台の中、その地区の中でも買い物ができてというような計画だったようですけれども、高蔵寺ニュータウンも今は、少子高齢化が加速しておりまして、次から次へとこの小さなモール、ショッピングセンターが無くなっていきます。買い物難民だとか、そういった問題が言われだしてからすでに10年以上が経つと思います。そんな辺り、ちょうど問題が発生しはじめた時期に私はまちづくりに参加したということになります。

＜ニュータウン初期の市民活動＞

ニュータウンが始まった頃、市民活動はとっても盛んでした。高蔵寺ニュータウンというのは、NPOがいっぱいあります。NPO以外に

高蔵寺ふれあいマップ

基礎地図資料作成：黒野雅好氏 (NPO法人高蔵寺ニュータウン再生市民会議)



住まいと暮らし

- 集合住宅
- 戸建住宅 (作成中)

店舗の情報

- 物販店
- スーパー・食品店
- 飲食店

交通と暮らし

- バス路線 (作成中)

健康と教育

- 医療施設
- 保健・福祉施設
- 学校
- 保育所・幼稚園
- 学童保育所 (作成中)

文化と歴史

- 文化交流施設
- 寺社仏閣・教会・史跡

経済と生産

- オフィス業務施設
- 工場・生産施設

農と自然

- 水田
- 畑・果樹園
- 公園・緑地
- スポーツ・レジャー施設

環境とエネルギー

- 電力施設
- 上下水道施設
- ゴミ処理・リサイクル施設

安全・安心な暮らし

- 警察・交番・消防署
- 災害時の避難所 (作成中)
- その他公共施設

も市民活動やコミュニティといったものがものすごくあって、その頭というか、代表の人たちがもう今70歳代になって、第一世代っていうんですけど、第一世代の方たちがすごく頑張っていてまだ現役を降りないんですね。なので、次の団塊の世代が中々頭を上げられないという、先導というか船頭というか、とても多くて勢いがある、市民活動も盛んなまちなんですけれども、なかなか世代交代ができないまちです。最初の勢いがあった第一世代の方たちがすごい勢いでまちをつくってきたんですね。

市民活動の力で、魚屋がないといえば青空市をすぐ開催して、舗装も何もして無いところにですね、トラックで水槽ごと地域に運んできて、青空市を開催したりですね、高度成長時代ですから皆遅くまで仕事をして帰ってきたわけですけど、高蔵寺駅からのバスが無いんですね。その時刻には、じゃあバスを運転してしまえということで、市民活動で深夜バスを自ら運行させた、と。そうやって働き盛りのサラリーマンたちを助けて盛り上げていたということがありました。

団塊の世代以上の人たちがいっせいに入居したもんですから、その世代の人たちがものすごく多いまちというのが特徴なんですけど、たぶん、いっせいに問題も出るんじゃないかと言われてるまちなんです。子育て支援も自分たちで全部つくってきて、サークルが次々にたくさん生まれ、8つある台の中に一度に、子育ても、住民運動も、地域運動も生まれて、いろんな面でとても盛んなまちだったそうです。

<障がい児が暮らしていくまちに、と考えた私>

高蔵寺ニュータウンは43年目なんですけど、30年目を経過したとき、私がいよいよまちづくりに参加するんですけど、まちには人口減少の問題が出てきて、どうするんだということでシンポジウムなどが始まりました。で、その頃、私に障がいのある子が生まれたんですね。その3番目の子がダウン症と言われたんですけど、私は不勉強で、何も知らなかったんですね。医者に告知されて、ダウン症ですって言われてもね、「はい？」っていう感じだったんですよ。本当

に何も知らず、え、ダウン症って言われたらどうするんだろうって思って、調べました。調べているうちにいろんなことがわかってきて。

私は今NPO法人で働いていますがね、その当時は営利事業に携わっていて、バリバリ仕事してまして、土日も出勤状態でした。しかし、ダウン症のことを調べていくうちに、こんなことやってる場合じゃない、と思いました。障がいのある子どもたちが育つための子育て支援からはじめ、しかし、子どもがいつまでも子どもでいるわけもなく、大人になっていくわけで、大人になっていくと、まちに住んで社会と関わる。ならば、まちづくりの運動に関わっていかなければ、子どもたちがこの地域で最後まで暮らせないんじゃないか、と思ったんですね。そうして考えたあげく、まちづくりに参加していこうと思ったわけですが、そこまでいろいろありました。

最初、やっぱり例に漏れず、私は泣きました。一日泣きました。なぜかわからないけど涙が出てくるんですね。健康に生んであげられなかったから涙が出てきたんですよ。でも涙ってというのは何かなと思ったら、やっぱり自分が悲しいだけなんです。いろいろ理由つけて。でも目の前にいる子は、かわいいんですよ。

<まわりから掛けてもらった言葉、言葉の力>

子どもを育てなければいけないって、くよくよしているときに、いろんな言葉をいただきました。ええと、どうしてもこれ言いたくて、ここに書きちゃったんですけど、まずこれ「1人目は女の子、2人目は男の子、3人目は障がいのある子で、人生楽しいじゃないか」って言われたんですよ。うちの夫の発言なんですけども、一緒になって10何年たっているわけですよ、そう思ってたんですけど、こんなこと言うんですね。ちょっと見直しちゃいましたね、ええ。もしかして私、あの、結婚してよかったんじゃないか、と初めて思ったりしたんですよ。

それから地域の近所の方から、ある地方、九州の言葉みたいですけどね、そこでは「知的に障がいのある子どもは恵比寿様だ」っていうのよ、と教えてくれました。「ニコニコ笑って幸

せを連れてくるからそう言われているのよ」って。そんな地方があるってことを、たわいない会話の中だったんですけど、とっても嬉しくなっちゃって、うちに神様が来たよ、そう単純に思いました。

子どもは全然歩かなかったんですね。筋肉のトーンが普通の人よりも60%くらい低いもんですから歩かない。やっとな、這っているんですが、次に行かないんですよ、でも、いつの日か歩いたんです。まあ、3歩くらいしか歩きませんでしたけれど、そしたら友達に「神様のプレゼントだねえ、よかったねえ」って言われたんですよ。普通にさらっと言われたんですよ。

ああ言葉って大事だなあって思って。もう目の前に困難なこといっぱいあっても、もしかしたら人に伝える言葉だとか、イメージだとかで、もしかしたらものすごく人生変わってくるんじゃないかと思ったときに、なんでも一緒じゃないかなって思いました。私は単純なもんだから思ったんですね。で、いつもそういうときに思うんです。そうだって思うんですね。「そうだ、私も誰かに素敵な言葉をあげたいな。活動している中でこういう言葉を心から言える人になりたいな」と。まちなも賑わって自分も楽しくてね、自分も成長できて、良いことじゃないかなと。

<ダウン症の子どもの親の会をつくる>

地域にダウン症の会というのはなかったですね。豊田のエンジェルっていう会があって出かけていったんですね。で、そこに行ったらそこを主催している方が、「なんで豊田まで来てるの、あなたの地域に無いならつくりなさいよ」って。無いならつくって、びっくりしちゃったんですけども、無いならつくるっていう発想がね、まったくなかったんです。教えて、教えて、ねえ教えてって状態だったモンですからね。「無いならつくりなさいの、あなた、自分のまちなに住んでいくんでしょ」って言われて、すーっとわかったんですね。それでダウン症の会をつくったんです。

そこからいろんなことが始まりました。ひょっとして保育園に入るのも大変なんじゃないかとか、幼稚園に入れてくれないんじゃないか、

とか。全然知らなかったことがわかってきたんですよ。そしたらなんで保育園に入れないんだろうって調べたらなんのことはない、別に法律で規制されているわけでもなく、「なんかしらん育てにくいモンで入れてくれんらしいわ」っていう話を聞いて、「そら、いかんがね」ってことで、会をつくりました。で、会をつくったら、きっと聞いてくれるだろうって思って、春日井市の行政窓口の日参するわけですよ。「ねえねえこれ聞いて、なんで保育園に入れないのさ」っていうことで話をするわけですけども、納得する答えが出てこないんですね。そのうちにうるさいお母さんが来たからしゃべってくれてるってことがわかったんですよ。

私1人の個人的なことだと聞いてくれないってことがわかったものですから、親の会をつかって、いろんなお母さんの言葉を書いて持っていったんですね。春日井市にレポートを一年間提出しました。ところが、4ヶ月くらい経ったときに言われたんですよ。「こんだけたくさん子どもがいる中で、ダウン症の子どもなんてたったこんだけの数でしょう」って、言われたんですよ。「こんだけしかいないんでしょ」って。「こんだけだけの人のために、春日井市の市政は変わらないよ」って。

<全ての障がい児の親の交流会をつくる>

もう、びっくりしたんですよ。「なんてこと言うんだ」と。でもそれに対抗する言葉が何もなくて、ダウン症だけじゃダメだと思って、全ての障がい児のお母さんの交流会を一年くらい続けて、で、とうとう書いたんですね。困っていることないか、今の福祉をどういうふうに思っているの、とかアンケートをして、しつこくしつこく1年間、春日井市に提出したんですよ。なんていうものを持ってくるんだっていう感じで思われたんですけども、通い始めると人間と人間だもんですから、最初はうとうしがられても、そのうち「よく来たね、あんたはそこから入ってりゃ」って段々仲良くなってくるんですね。「続けるって大事だな」って、ここで学びました。

で、そんなことで障がいをもつ子どものお母

さんたちと交流会をやっていたんですが、ある日これはもう頃合もよし、と思って、「保育園をこんなふうにしてほしいんですけど」と、具体案を持っていったらですね、市役所の人があると、この前と同じこと言ったんですよ。「こんだけ子どもがいる中で、障がいのある子どもってこれくらいの数でしょ」って。ダウン症のときはこれくらいだったんですけど、ちょっと増えていたんですね。「これくらいだろう」と言われたんですよ。「そんなことで春日井市の市政は変わらない」っていわれたもんですから、「なにーっ」と思うんですね。どうしたら聞いてくれるだろうと思ひまして。

<全ての子どものための子育てNPO法人、そしてまちづくり>

それで考え抜いて。全ての子どもの環境を改善するっていう言葉で伝えたら、ひょっとしたらその中で障がい児の子ども環境を変えていけるってことが、言えていけるんじゃないかと子育てのNPO法人を立ち上げたんですね。なんかNPOってあるらしいと勉強しました。今から10年くらい前のことなので、なんかよくわからないけど私がやりたいことを調べていったらNPO法人が当てはまるみたい。これでなんとかならないか、個人じゃないもん、法人だもんね、ということで、NPOを勉強しまして、立ち上げました。

で、そんな活動をしてやっとな話を聞いてくれるようになったんですね。「ああ法人の代表さんですか」ってことで、一応とりあえず、窓口で帰されなくなったんですね。ですけれども、はっと気づいたんですよ。保育園に入れたのはいいんですけど、はて、このままでいくと大人になると気がついたんですよ。

子どものままじゃないんだ、子どもは。私の子どもであっても社会では子どもでなくて大人になるって気がついたときに、いかん、いかん、こんなことではいかんと思って、まちで育つんだってこと。で、まちづくりをしようって。まちづくりに参加するということは、高蔵寺ニュータウンのことを調べなきゃいけない。

ニュータウンで活動してきた人と会わなきゃ

いけないというか、会って話を聞いて協議会に出たり、いろんなことをしていくうちに、ああ障がい者だけの問題じゃないな、高齢者もそうだな、自分もそうだね、自分も年を取るね、自分の親もそうだなと。考えていくうちに、もしかして幸せで暮らすっていうのは、誰か一つ個人の人が幸せになることが幸せじゃなくて、自分の周囲の環境が、笑ってられる環境になることでひょっとしてまちが変わっていくのかな、人が変わっていくのかななんて、ちょっとぼんやり思いはじめていました。

<住民運動キーパーソンの林明代からバトンタッチ>

高蔵寺ニュータウンには、30年くらいコミュニティ活動に携わって、いろんなまちづくり活動に参加していた林明代っていう方がおられました。私はこの方と出会ってですね、年齢はもうひとまわり以上違うんですけども、ああ同じこと考えて同じ価値観でやってらっしゃる方がいた、と思いました。その人からある日言われたんです。「私はもう年とったから、あなたに交代したい」って言われたんです。何を交代したいのかなって思った、びっくりしたんですけども、有無も言わさないような真摯な目つきをして言われちゃったんで、「はい」って言っちゃったんですね。ああまちづくりに、ここで世代交代を、今この喫茶店でしたんだな、という形だったんです。そこからまちづくりへと入っていきました。私自身がなんでまちづくりに移行しようと思ったかって言うと、子育て支援をやっていると、自分と同じ世代か下の世代しか周りにいないんですね。自分の子どもが大人になったとき、これだけでは全然役に立たないや、と思ったもんですからまちづくりへとすすみました。

<NPO法人「まちのエキスパネット」とふれあいパブ>

今この2つ目の法人をやっているんですが、これに関わってる人たちって本当に年齢さまざまなんですね。職業もバラバラ。それでまちにはいろんな人が住んでるわけですから、いろん

な立場でものを言われます。そこで考えるんですね。私今まで子育て支援って言いつつ、障がい者のことを訴えるってことを言いつつ、ああ自分の立場しかわかっていないなど。いろんな代表の立場の人は、他の立場の発言はできないんですね。あの、立場を超えてどう思っているとか、どうしたいとか、本当はどう思っているか、とか本音のところを話すことってというのは、それぞれの協議会の部屋の中なんかではできない。そこから何か勝ち取って自分のところに帰らなきゃいけないので、自分たちのことだけ訴えて帰るっていうスタイルがとっても多かったんですね。いろんな協議会に出席してみてもう思ったんですけども。ああそうか、自分の立場を超えたことってできないんだなあって思っています。

じゃあ、違いをこえて繋がりをもつにはどうすればいいのだろうって考えて、「春日井ふれあいパブ」っていうのを開催しました。パブって言うからには、お酒を飲む、お酒を持ち寄って、500円の運営費を払ってもらってですね、1品持って来てねというと、皆お酒以外に料理を1品持って集まってくれるので、主催者としては楽だったんですけどもね。毎回テーマを決めて、ザックバランにいろんなところに流すんですね、「こんな集まりがあるから来ない？」という、いろんな職業の方が来ました。

ボランティアの方から、会社経営者の方から、学校の先生から、いろんなこと思っている人たちが集まって、でも、立場が違うからどうにもできないだろという気持ちを持っていて、でも集まりました。2ヶ月に1回くらい開催をしていたわけですけど、回を重ねるうちに、本当にそんなところから、協働事業が次々生まれました。そんなところから次第に横の繋がりが生まれていきました。商工会議所の人や、行政の人がいたり、自治会の人や、それこそ警察の人がいたり消防隊の人がいたり、大きな会社の社長さんもいたり。4回目になったら市長さんが参加しました。副市長も参加してくださいました。そういう方も、参加して、皆で飲むところから人脈というのをつくっていききました。

で、私たちの法人の目指すと言うか、まちづくりを目指すものはともかく共生、インクルージョン、10年前からインクルージョン、インクルージョンって言ってまして、それぞれが緩やかに繋がった時間の中で自分の言いたいことを言い、それを共有していこうっていうふうに皆で誓い合いました。

<拠点づくり：古民家「和っか」>

私たちの拠点、本拠地は、ニュータウンからちょっとはずれたところにある古民家なんです。築90年、大正時代の古民家なんですけれども、私が以前に、一つ目のNPO法人子どものNPO法人をやっていたときに、その古民家を見つけました。でもそこは廃屋だったのです。ところが蜘蛛の巣の向こうに、大きな大黒柱が見えて、これはきっと立派な古民家であろうって思いました。掃除したら貸してくれるってことだったので、8ヶ月かかって掃除しました。なんか息吸ったら発疹が出るんです。で、オエッて思いながら掃除をやりましたけども、とても楽しかったです。

電気も無いもんですからね、これはどうにかして電気を手に入れなければ、そうだ、電気がほしい、でもどうにもならん。一生懸命やったんだから、新聞に出してよって新聞社に電話かけて載せてもらいました。すると新聞を読んで電話かけてきてくださった方があって、「電気がないらしいじゃん、電気つけてあげるわ」って。「ええ本当！思いもよらんかった」と口では言いまして、ほんとうはどなたか御願ひ、と思っていました。それで電気をつけてもらったのです。で、それからまた寒いんですよ、古民家は。「ガスないじゃん。ガスないじゃん」って叫んで「ガスがないから大変そうだった」と新聞記事に書いて頂きました。電話がかかってきて、3日後くらいにかかってきたんですよ。「ガスつけたげるわ」って。「ガス器具もないみたいだね、そっちもあげるよ」とガスヒーターを持ってきてくださったんです。売れない在庫品があるということで、いただきました。やっと暖かいところで改修作業ができて、8ヶ月を乗り切りました。

で、だいたい100名くらいのボランティアさんのおかげできれいになって、その代わりもうこれは善意の館だもんですから、いろんな人に使ってもらってます。で、カフェとして使ってますね、オープン。で、ここで先ほどの写真にあった「かすがいふれあいパブ」をやっています。ここから実にたくさん、いろんな協働事業が生まれているんですね。

<協働事業その1. お茶屋さんと障がい者の事業>

お茶屋さんがもうすぐ、定年、定年って個人経営だからないんですけど、もう仕事を辞めたい、と。でも自分が今まで培ってきたネットワークがありますね、それを誰かの役に立てたい。できたら繋げていきたいってことを聞きました。それならば、良い人がいるよってって、ちょうど奥に若者が来ていたんで、その子呼んで、「障がいのある人たちの就労をつくりたいって言ってたでしょ、じゃあお茶を納める仕事を一緒にやったら」って引き合わせました。一緒にやり始めたら、それまで障がい者の世界を全然知らなかったお茶屋さんが、「私はこんな年になってから人の役に立つとは思わなかった。」ということで、譲るのではなくて、一緒にお仕事をなさって、なんとそのお茶屋さんは社会福祉士の資格を取っちゃったんですね。福祉の世界へ入っていかれました。そういったような嬉しい協働の事業もいっぱい生まれてよかったなあと。それはこの場所から、「古民家とっか」からいっぱい生まれました。

<協働事業その2. 障がい児の療育センター、児童デイサービス>

高蔵寺ニュータウンのある春日井市は、障がい児の療育については、ちょっと遅れていて、8年前くらい前に京都の療育センターっていうところに見学に行ったときにショックを受けたことがあるんです。私たちの地域にはこんなものがない。障がいをもつ子どもが生まれたときに聞きに行く場所さえなかったんです。なので、なんとかそのエキスパート、専門職の人を確保したかった。愛知県コロニーがお膝元なものですからね、そこを退職なさってまだ現役で、し

かもエキスパートで知識と経験豊富な人が退職するらしいという情報を掴んでですね、走って行って、「もうすぐ退職するって本当ですか」と聞いてまわりました。その時に出会った大澤さんという人との出会いにより、現在の障がい児の療育の基礎を築いてもらいました。その人が今も辞めずにおられる。彼女が本格的な療育をしていただけるもんですから、うちの児童デイサービスに。春日井市が利用者を快く紹介してくれるんです。私たちのして欲しい支援を具現化してくれました。

この写真が「古民家とっか」の正面ですね。古い扉を全部、替えました。写真にちょうど私に1つだけ良い言葉を放った旦那が写ってますけども、その横にいるのがうちの子ですね。

ええ。なんかウクレレを持っているんですけど、弾けないんですよ。弾けないんですが、その曲に合うように、全部キーをそろえておいて弾くだけでまるで演奏しているかのように一緒に弾きます。リズム感だけはいいもんですから、曲に合わせて。そんなことで、外に出ることのなかった子どもを、とにかくただ連れて行くだけじゃなくて、「うちの子です、うちの子ですウクレレやってます、すごいでしょ。でもね本当はこうでね、本当は弾いてないんだけど真似が上手なの」って言いながら、かわいがってもらって「障がい者福祉をどんなふうにもちづくりの中に入れていくか」という話をできるきっかけになっています。これが2階。廃屋だった所を全部きれいにしてみんなで時間を過ごしています。

<「NPOまちのエキスパネット」の三本の柱>

そんな中でNPOの三本の柱が、1. 広報誌発行事業、2. まちづくり支援事業3. 障がい者就労支援事業と次々にしっかりと立てられてゆきました。

【1の柱：広報誌発行事業「まちつぼニュース」】

紙の媒体は絶対必要であろうということで、最初8000部から始めて私たちの新聞をつくりました。中日新聞が強いところなんですね、中日新聞にとりあえず折り込み広告あつかいで、折



り込んで今は2万4千部の配布をしていただいています。そこがこれから私たちがやりたい、皆に参加してもらいたい、皆でつくりたいか、みたいなことを投げかけるための市民NPOのコミュニティ紙ですね。「まちつぼニュース」って名前で、なんかちょっとへんてこりんな名前をつけると、目に留まるだろう、っていうことでこんな名前をつけました。現在は、発行部数も増え、2万4千部。朝日新聞にも折り込み始めました。

【2の柱：まちづくり支援事業「高蔵寺青春映画祭」・「フォークジャンボリー」】

まちを活性するために何をやるかって、まずハードルの低いのはお祭だろうということで、祭の企画から始まりました。ですから自分たちがやりたいことではなくて、まちの多くの人たちが望んでることは何かな、って調べました。そしたらやっぱり団塊以上の上の世代の人が多くいものですから、「高蔵寺ニュータウンには映

画館がないでしょう!」、「電車乗って名古屋まで映画を見に行くのは嫌だ、映画やってよ」って言われて、映画上映会をやりました。6本くらい。3日間ぐらいやったんですよ。これが「高蔵寺青春映画祭」。私たちはイベントの名前の付けるとき必ず高蔵寺って付けるんです。そんなことから高蔵寺は盛り上がってるということから入ると、それに便乗する人が多くなるという作戦なんですけど。

<高蔵寺青春映画祭に看板絵描きさんが出現>

新聞に書いてくださると読む人がいますよね。映画館で、大きなスクリーンで映画を見ようってことでね、こんなのやるよって記事にしたら、昔映画館で手描きで看板を描いてた人がたまたまその新聞を読んでくださって、名乗り出てくださいました。もうその仕事なくなっちゃったけどねって。で、描いてもらったんですよ（資料を提示）。本当はこれ、カラーなんですけど、お金がないもんですからケチって、

白黒にパンフレットになったんですけども、カラーできれいな手描きで、さささっと描いてもらって。まあだいたいわかりますよね。これオーダーリー・ヘップバーンね。『ローマの休日』をやったんです。

この企画をやる前に、私たちは昔の映画がわからないわけですから、高蔵寺のセンター地区にあるショッピングモールに行って、どんな映画をやったらいいのかアンケートをとったんです。600人くらいにアンケートしました。意外と、洋画が多かったんです。上映希望の1位は『ローマの休日』なんですね。もうすこし下の方にゴジラ映画や、ガメラ映画がランクインされていて、私の知らない映画がいっぱい並んでまして、とりあえず6本やることにしました。結果としては、意外にも、ゴジラやガメラに人が集まりました。ガメラがこんなに反響があれば、もう『ローマの休日』なんて、どれだけ人が来るかと思ってたら、全然なんですよ。半分くらい。500人くらいの会場なんですけど、250人くらいしか来ない。後でアンケートしたんですよ。『ローマの休日』ならいつもDVDで見てるって書いてあるんです。アンケートって当てになりませんね。だいたい1位、2位って、この映画は知ってますよって意味だったのですね。アンケートじゃなくて、これからは自分たちの触覚でやることに変えました。いろいろ学んでおります。

それからですね、これはうちの古民家の2階で、SPレコードの会をやりました。それをきっかけにまちづくりに参加してもらう人を増やすためにやっております。

徹底的にこの年代の人たちが喜ぶ交流会や、医療講座を開催しました。鍼灸の先生を呼んで、「つぼって何ぞや」みたいなこともやりました。人が来ないだろうって思ったら、これがまた、ものすごく客が入ったんですよ。お断りするくらい入って。全然予測ができなかったのですね。お客の入りがよくったり、わるかったり。でもそれをきっかけに、あなたたち何やってるの？と、いう話になって、自分の子どもの話をしたり、まちにこんなもんが足りんからやってるんだ、という話をしたり。わかってもらうんじゃ

なくて、まちに興味を持ってもらいたかったんですよ。

＜「フォークジャンボリー」というお祭り＞

高蔵寺ニュータウンはシニアの世代、団塊世代以上の方がとっても多いので、そうだとフォークがいい、という発想で、フォークジャンボリーというのをやれば人が集まるんじゃないかと考え、そうだとフォークジャンボリーを開こう、ってことになりました。それをフォーク世代の人に投げかけたら、ものすごく熱くしゃべるんですね。何フォークジャンボリーやるって、これを出そう、あれ出そう、って。企画前から何やるのかこれやるのかって聞いてくる。じゃあ、と噂を広めたんですね。フォークジャンボリーってやるらしい、って。とにかく、人を集めて楽しさを共有するっていうことをやりたいんですよ。楽しさを共有する。勉強を共有する。あと困難を共有する。いろんな共有するがありますけど、共有すること。まちづくりの中では楽しいってことを共有したいと思って、それを一生懸命やりました。

パワーポイントに「世代融合された付加価値としての賑わい創出」って難しい言葉ならべて書いてありますが、要するに、「若いも若きも寄っといで」って言う意味ですね。そういうたくさん世代が参加できるイベントって言うのを毎年、開催しようと思っています。「高蔵寺フォークジャンボリー」は、年に1回秋にあるお祭りで、ニュータウンの祭の中でこれ1番大きいイベントに育ったのですが、都市緑化植物園を貸しきってやるわけです。コレについて話し始めるとまた一時間かかります。舞台をいくつ



かつくり、予選から本番までのストーリーを組み立てるんです。参加者が増えて増えて、聴衆も1万5千人まで動員することができました。

【3の柱：障がい者就労支援活動「カフェ・ボーン」】

そして、ようやく私たちの本来の目的である、障がい児、障がい者の就労支援事業をNPOの活動の中にいれました。子どもがいつか大人になるんだというところで、就労支援事業が私たちの目標です。人間が生きていくうえで誰かの役に立つといいって、皆がそういう思いで生きていってほしい、そういう思いを込めて私たちは就労場所をつくりたいと思っています。地域の中にたくさんの就労場所をつくるということが私たちの最大の課題であり、地域の中に「社会的事業所」としての就労事業所をつくりたいのです。現在、児童デイサービスを3ヶ所でやっております。

高蔵寺駅の近くに去年の9月にカフェをオープンさせたんです。これは障がいのある子どものお母さんたちがつくりました。障がい者の就労って少ないんですね、深刻なくらい。で、自分たちの子どもは知的障がい者で、重い方ですから、受け入れてもらえる企業なんてまず無いんですね。で、作業所もいっぱい。なので自分たちで就労場所をつくるしかないんです。今は時代が変わって、自分でなんとかしなきゃいけない状態になって、とても苦しい状態になっている。国や県からの補助金では賄えなくなってきてて、自分たちで何とか、要は商売しなきゃならないんですね。自分たちのことを自分たちでしなければいけない時代になって何か自分たちで障がい者の将来だけではなくて、自分たち親も楽しみを持って子育てができるような角度ではないと、ダメだなと思ったんですね。

私たちはいつからか、障がい児とは呼んでいません。外に言うときにはわかりやすいので障がい児という言葉を使いますが、自分たちの間では、「子どもたちが、子どもたちが」と言っています。お店も福祉ショップでなくて、普通の「カフェ」なのです。そのお店では、ライブもやっているものですから、お酒も飲める

というところ。ライブにはたくさん人が集まります。それはお酒を飲むときはですが。お茶の時間はあまり来ないんですけど、ランチは流行っています、そんな状態です。

ボーンはなぜ経営してるかという、原価率計算をしたり、どんなものが世の中に受け入れられるかなどの調査を一生懸命やってます。売れなければ、働く障がいのある人は賃金はもらえないんですよ。売り上げが上がらないと、生きていけないんですよ。障がい者の年金なんて少ないもんですよ。このままでは、親が死んだら1人で生きてはゆけません。ですから、この事業所が将来、お金をもらえるような、就労支援事業、就労事業所をつくろうと思って、お金の計算までできるように周りが、支援する人たちが、経営の勉強をとの願いから経営しています。なのでここは経営コンサルタントがついています。日々怒られながらやっております。



＜NPOでまちづくりを考えるテーマと仕組み＞

私たちNPOが市民活動でまちづくりを考える場合、テーマとしては「高蔵寺ニュータウンで人生の最後まで暮らしたい」をテーマにして、皆で共有して、やっていこうと、スタッフがこれを共有しています。

【仕組み1. 継続するコミュニティ・ビジネス】

で、仕組みづくりをしなきゃ、ということで、自立した事業体になろうと頑張っています。ソーシャルビジネスと言われてはいますが、コミュニティ・ビジネスをつくり出さなければならぬということで、今事業所が5つありますが、全部有給で継続してやれるようになりました。

【仕組み2. 世代融合から生まれる付加価値としての賑わい創出、独自のイベント開催】

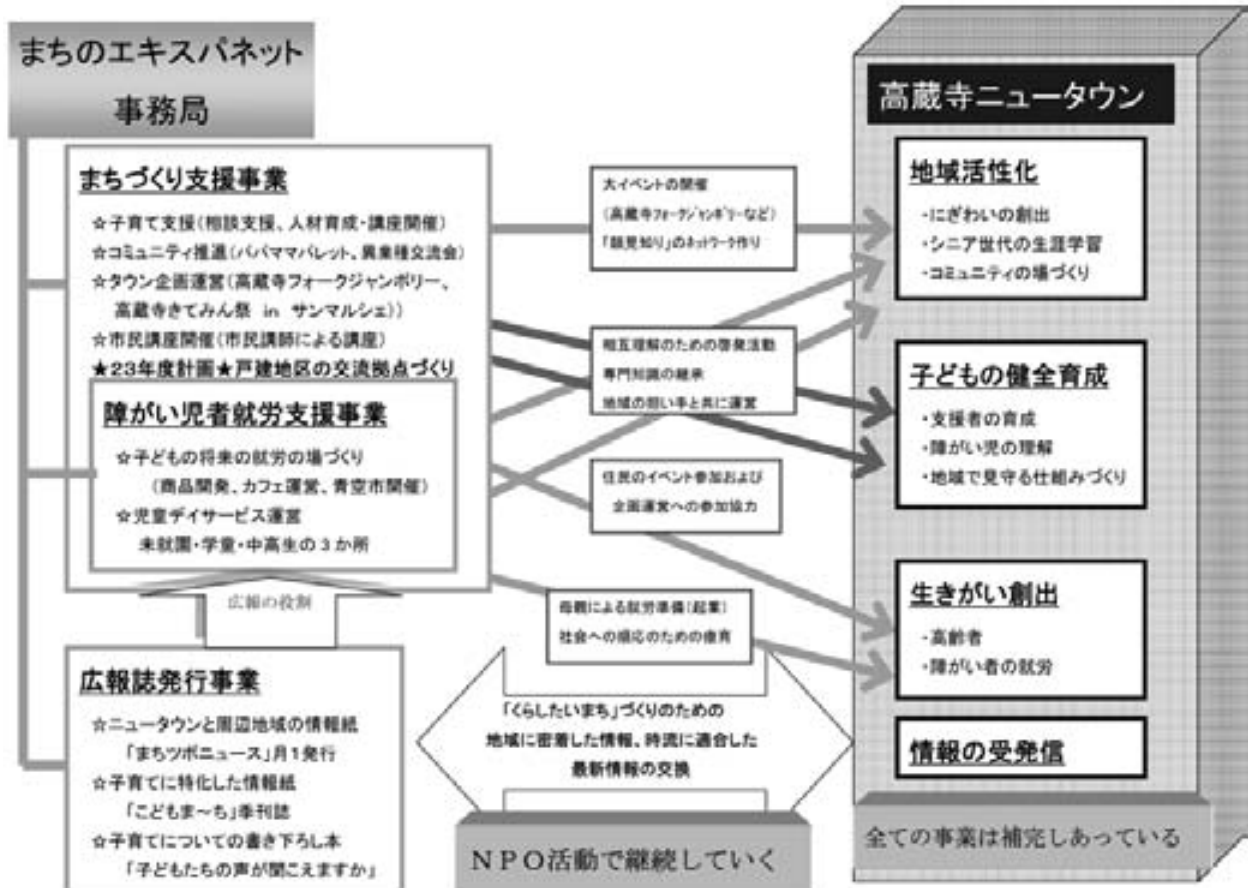
これはもう、今までお話しましたように、次々と事業をやりながら、イベントを開催しながらつくってきた仕組みです。

【仕組み3. 人材が活かされる支え合いの仕組み人材バンク】

高蔵寺ニュータウンには、団塊の世代で力を持った人が、スキルのある人たちがとても多いもんですから、何かするときには他所からエキスパートを呼んでくるのではなくて、自分たちのまちの問題を、自分たちのエキスパートを使って解決したい。技術と知恵を提供できる人を募集する。そういったことですね。よそから呼んでくるのではない自給自足のまちをつくる仕組みです。人材バンクに今146名くらい登録していますけど、そういった仕組みをつくっております。

＜願いは、フレキシブルな地域づくり＞

で、目指すはフレキシブルな高蔵寺の地域づくりってことですね。困難なこともあったんです。最初はお金ないんですよ。先ほどの古民家もですね、きれいにするから貸してよ、って言ったら良いよって言ってくれたんですけど、300坪くらいあるもんですから、持ち主が固定資産税分だけで良いよという言葉に甘えてそれ



だけしか払っていません。でも、それでも払わないといけない。先ほどガスをボランティアでつけてくれたのはいいんですけど、ガス代は払ってくれないですね。ガス代払わないかん、電気代も払わないかん。印刷したら印刷代払わないといかん。活動費がかかる。ていうことでやっぱりお金いるじゃんってことで、とにかくボランティアどころか、積み立てをしながら毎月お金を払って活動していたんです。自分たちで共通のお金をつくって、お財布つくって。毎月そこにお金を1万いくつ、スタッフ十人、投資しながらやりました。古民家をきれいにするときは皆ボランティアでやってくださったんですけども、材料費はかかるわけですよ。材料費はやっぱり何百万かかっているわけです。

そのお金が全然無かったので、最初になけなしのお金を筆筒から出してきて、皆旦那に内緒に出してきて、だから後に引けないんですね。後に引けない状態にしていつも始まっています。スタッフである障がい児のお母さんたちは、なんとかしたい、子どもが大人になる、大人は地域で育つ、地域の人と関わりを持たないといけない。なんとか地域ニーズを受け止める仕事がしたい。障がい者だからって、甘えているのではなくて、私たちは人の役に立ちたい。そんなことでやろうと思うと、先ほど出たカフェ・ボーノをするにも経営を学ばないといけない。そんな大きなこと言われたら勉強しなきゃいけない。仕入れ、仕込み、原価率計算、世の中で流行っているものは何か知らなきゃならない。一生懸命つくっても買ってもらえないものをつくっては意味ないですよ。そういったことを勉強しました。で、2年勉強したんですかね、でその前倒し何年かが、それぞれにあって、共同でやるようになって2年ってことですね。

念願の障がい児のデイサービスを開始するにも、お金なくて大変でした。児童デイサービスって言うのは県や国の補助企業、指定事業なんですけれども、お金が、2ヶ月遅れで入ってくるんですね。エキスパートを連れてきても、給料が2ヶ月間払えないんですよ。で、連れてきたは良いけど「すみません折り入って話があるんです」「2ヶ月給料無しでもいいですか。す

みません、よろしくお願いします」って返事をもらうまでに我先に頭を深々と下げ、良いよって言われたら頭上げて、みたいにやったんですけど、大変でした。ええ。自信が無ければ言えないので、そこまで必ず、必ずや、やるからと約束で、エキスパートとして給料をきちっともらってきた人を集めて、本物の療育を提供したい。それを地域に無かったものをつくりたいということで、これも頑張ったところですね。で、先ほどの映画祭は1200人くらい、フォークジャンボリーって音楽祭は1万5千人くらい人を集めて賑わうことができました。

そんなこんなでやっているうちにニュータウンは43周年をむかえました。私が13年を過ごしている間に、ニュータウンは43歳になりました。市民活動全体で言えば、今は成熟期と言われています。先ほど言ったように第一世代は頑張っているけど、団塊の世代の人が交替できないでいたり、だけど飛び越えて次の世代が参加をしたり、いろんなことがあって、私もそんなことをしているうちに次の世代に継承しなければならない年になっちゃってですね。

<私たちの新しい発想でまちづくり、世代融合の、障がい者インクルージョンのニュータウン>

いつも世代交代がテーマですね。私たちは、世代交代ではなくて世代融合をやっていると言っています。とにかく一緒にやるということです。イベントでも子育て支援でもなんでも、自分がこの年だったら上の人を連れてくる。自分が中心になってやっていかなければならないときは若い世代と共に活動する。そういったことでわざわざそういうことをやっております。

春日井市の高蔵寺ニュータウンは国のプロジェクトによって開発したものですから、これまで春日井市と関係が希薄だったんですね。なので市の中にニュータウンの良さってあんまり知られていないんです。数年前までは春日井市行政にはニュータウンの再生って部署も無かったくらいです。予算なんかはほとんどついてないんですね。じゃあ市民活動を先にやって実績をつみあげていこうという考えです。

ニュータウンの高齢化、そして日本中が誰も

経験したことがない超高齢化社会に今から向かう。どういうふうになっていくのか想像がつかないっていうふうになって、こういう研究はいろいろあるかと思うんですけども、私たちは私たちのまちを知ってるのは地域住民だということで、私たちの新しい発想でやっていこうとしました。

私たちは障がいのある方が活躍できるかもしれない、そういうまちをつくる、クリエイティブな活動がしたい。創造したい。楽しくつくっていきたくてことですよね。活躍なんですね。支え合うとか言うんじゃないで活躍できるかもしれないっていう、ことを考えたいんです。で、特に私たちがいつも接している障がいのある子どもたちっていうのは難しい子どもたちなんですね。生きづらさをちょっと感じている。自閉傾向があったりアスペルガーであったり発達障がい、発達遅滞。知的にも障がい重い子どもたちが多いんですね。その子どもたちのことは、親でもなかなか育て方がわからないので、療育っていうものがあるわけです。でもそういった特性を社会の中で逆に活かすことができないかってことで、これから取り組んでいきます。

ニュータウンの特性として、ベッドタウンですから、働く場所があまりに無いのです。皆名古屋に働きに行くわけです。寝に帰ってくる場所としてつくられたわけなので、働く場所が無いのはしょうがないのですが、でも、何とかすれば地域の中にもっと働ける場所があるかもしれない。ニュータウンが超高齢化し、団塊の世代の人たちも地域に戻ってきて、地域デビュー今からする男性もいっぱいいて、地域の中にいる人たちが今増えてきて、でももっと働けるはずですよ。いろんな形で、働ける人たちの中に障がいのある方たちもいるんです。障がいをもつ子どもたちもいる。このまちを未来のあるまちにしたい。働ける場所があるかもしれない可能性ですよ。地域ニーズにもっと応えられるかもしれない。ニュータウン問題は。もう問題、課題が山盛りなんですけれども、その中で、その支える方に回れるかも知れない。地域ニーズに応えられるかもしれない、ってことを考えて、それってというのは補完しあう関係なんです

よね。私がこの部分やって、じゃあ私この部分やって、お互いに役に立つ。補完しあう、障がいのある人たちのことを、地域の人たちが、その特性を理解していただければ、何かできる。

地域の住民にも、障がいをもつ人は何が得意か、何が苦手か、どんな配慮が必要かみたいなことをわかっていただいたらね、違ってくると思うのです。詳細にわからなくても、保見団地の、楓原さんの先ほどの報告にあった小さなブックがあれば、「おはよう」って言えるわけですよね。障がいのある子どもとすれ違ったときに、ちょっと知ってたら、どうして今おはようって返せない子どもたちがいるのか考えはじめ。「おはよう」って言われて、感じが悪くて返せないんじゃないで、返せない、何らかの理由があるから返してない、じゃあどうすればいいの。知っていれば、たとえ返事が返ってなくても、声をかける人は増えるはずですよ。

<特性に付加価値をみいだす>

そういったことを理解すれば、特性を仕事に活かすことができる。一生懸命真面目に取り組む人が多いのです。だからキャリア化するんですね。特性があるだけじゃダメなんです。仕事にするんですね。彼らは理解されにくいんですけども、実は、皆さんと心の中は同じです。お友達がほしい、ありがとうって言われれば嬉しい。役に立てると嬉しいし、自分も趣味がほしい。おいしいものが食べたい。皆一緒なんですよ、心の中は。ですけれどもなんか違うでしょ、って思われてしまうけれども本当は同じなんです。そういったところで仕事に就ければ、その子は外から喜んでるように見えなくて喜んでるんですよ。そういったことをちょっとでもわかってもらえたら、キャリア化できる。特性に付加価値をつける。同じことしかできないじゃないかって言われたら同じことを一生懸命する。一定の仕事ができるんです。特性に付加価値を見出すってことが彼らのキャリアづくりです。

くニーズがサービスに、サービスが仕事になり
キャリア化されるまで>

高蔵寺ニュータウンは高齢化地域になっても本当に深刻になったときに私たちの出番だよ、って言える仕事をたくさんつくりたいんです。ニーズがサービスが変わって、サービスが仕事になってキャリア化するんです。そういったのを今日指しています。

現状と課題を、じゃあ知らなきゃダメじゃないかってことで、こういうワークショップをみなさんやったことがありますか。

いつも私たちのスタッフでやってるんですね。左がですね、マイナスの未来なんです。マイナスの未来。このままでいったらニュータウンこんななっちゃうぞって言うのを出し合うんですね。会議形式でやると、私のような声のでかい人が勝ってしまうので、しゃべれなくても意見の言える人がいるはずですよ。そういったことを尊重するためにいつもワークショップです。マイナスの未来を皆さんで考えていくんです。こうなっちゃうわ。こうなって、不動産の価値下落現象。ちょっと今もう下落してますけども、ニュータウンの地価が下降し、不動産価値が下がっちゃって、などと決定的に悪いパターンを考えて、その後に、マイナスの未来じゃなくてプラスの未来を考えるんですね。

なので一日がかりですね、これやると。プラスの未来を考えよう、何とかできるのではって。皆で、これあだよ、あだよってことを出すと、下落するどころか、価値が上がってくるんですよ。住んでる地域に対する意識が変わってニュータウンが目ざされると、自分のまちが好きになります。現状と課題なんか知らない人でも、高蔵寺、高蔵寺って言われたら、高蔵寺に住んでるのよ私と、言い出すんですよ。なんかこんなふうに花火のように下までいったらパーンと上になってまた上に行くというプラスの未来を打ち上げます。

肝心なのはこの図の中のどこの部分を、私たちはやっているのかっていうのを、共有するんです必ず。どこの部分を今やっているのっていうと、皆ですぐにわかるのは、どこに進むか、ってことなんです。逆に言うとじゃあ何やん

なきゃいけないの、に変わっていくんですね。

で、次はこの図になるんですけど、「利用者の未来を考える表」です。この図はですね、1番上に11、12、13、これ年度ですね。2011年度するとき、13歳で特性がダウン症候群って書いてある子が、2012年になると14歳ってことです。この子が18歳になったときのところがちょっと黒く塗ってありますよね。要はこの子が18歳になる2016年に何がなきゃいけないのかが、この表でわかるんです。

こういう表を全部つくって、うちに通っている子どもたちがこれから困らないようにします。18歳になったら、学校卒業しなきゃいけないんです。行くところが急になくなります。義務じゃないので誰も救ってくれないので、このいろんな子の18、18、18、18っていうところは就労しなければならぬ歳であり、年である。この年には、これだけの就労する数が地域にないと、ダメだよ、今私の周辺だけでもちゃんと皆が行くところをつくらなきゃダメだよって思うと、最低これだけはつくらなければならないことがわかります。5人に1つくらいの事業所つくりとしてるので、じゃあ後いくつつくらなきゃいけないだろうっていう話ですね。

あと25歳のところは、グループホーム、ケアホームとかそちらの方を立ち上げなきゃいけないですね。これは法律的にちょっとハードルの高い事業なのでとても大変なのですが、こんだけの子どもたちが、親が死んでも生きていける法律が今は無いんです。親が死んで、その子の人生をちゃんと最後までどこで見てくれるかなって、誰にも保証がないんですね。そういう場所をつくるために、こういう表をつくって、何年までに何をしなければならぬのかを知る。こういうことに関わりながらも、何年度にこれだけできていなければならないっていうのを、いつも確認してます。で、今年度何をやらなければいけないか。5年後まで出てますね。やらなきゃ意味が無いんです。前に進まなきゃ意味がないんです、と言い過ぎると、周りが引くので、心の中で言ってますね。外に持ち出さないように心の中で、これからの高蔵寺に繋げるんです。

私たちがつくりたいのは障がい者の作業所で

はないんです。先ほど言ったように地域ニーズを解決するための事業所を、社会的事業所をこんだけつくらなきゃいけないんですよ。たくさんつくらなきゃいけないのは、障がい者の作業所をつくりたいんじゃなくてそこに地域の人のニーズを解決するだけの数ができると思ってください。社会的事業所をこんだけの数つくるんだって。そこには買い物支援に携わる障がい者の事業所、もちろん障がい者だけではできませんので、そこに地域の人がお仕事として関わってもらえたら嬉しいです。そういった仕組みをつくりたい。ということ考えてます。

<障がい者がまちづくりのキーパーソンとなるような仕組みのクリエイト>

なので、私たちの狙いは障がいのある方がまちづくりのキーパーソンになるような仕組みをつくっていききたい。まちづくりしたいって言うよりまちづくりをクリエイトしたいって言ったほうが、ちょっとテンションがあがる、自分の中で。そんな感じですね、発想はいつも。

で、障がいのある方が地域社会に関わることによって地域もリハビリを行うと思うんですよ。その人のことを良く知ろうと思って神経を集中して、その人の気持ちに寄り添ってお話をしたり、それってあの、障がいのある無しに関係なく、先ほどの外国人の方もそうですよね、気持ちに寄り添わないと何も見えない。上から見ては何も見えないんですよ。そこに住んでいないとわからなかったりしますね。そういう方がいると逆に、地域は優しくなれると思っています。

今までの障がいのある方は、とくに知的に重い方なんかは社会福祉法人が面倒見ていた。これまではこし居場所が無かった。一般企業なんかは障がいのある方を雇用すると国からいくらかもえるという政策の中の雇用があったりするけど、その企業義務も2年までで良い、となっていました。そこからは保障されない。ここも永住の地ではなかったりします。今は企業も積極的に障がい者を雇わなきゃいけないと決められてはいるのですが、環境が整わないので、働きづらさを感じながら、一生懸命やってらっし

やる方が多いと。で、私たちNPOはですね、自分の地域にあった自分たちの社会的事業所をつくりたいのです。

<CBR=コミュニティ・ベースド・リハビリテーション>

CBRって耳慣れない用語ですが、世界保健機構ってところがうたっています。地域のクオリティを上げる、生活の質を上げるってことです。障がい者が、まちづくりのキーパーソンになって障がいのある方の特性を生かした仕事を創出して地域の仕事をすることによって、地域の高齢者の生活の質を上げる。そうやって地域ニーズを解決しようとする動きをCBRって言うそうです。

そういったことを私たちができたらなあって思います。最近思うことです。「高蔵寺ニュータウンのまちづくりと私たちが思っている障がい児の未来をクリエイトするNPO活動を結びつけたい」まちづくりって終りがありません。誰も一番いい方法わかってないんですよ。私もわからないです。

<まちづくりの要1. 活動をやめないこと、2. 誰かの役にたつ仕事をつくること、3. 若い世代にバトンタッチすること 4. そして子どもの笑い声の響くまちにすること>

思いついた活動を止めないことが大切だと思うんですよ。そして誰かの役に立てる仕事をつくる。誰かの役に立てる仕事がないって誰にとっても寂しいことですね。あるってことがどれだけ生きがいに繋がるか、生きていくことに繋がるかって思います。

あと若い世代にバトンタッチしていくこと。これは必ずあの、私も林明代さんからバトンタッチされたわけですが、もう潔い方で「明日からあなたがやって、口出しませんよ。」なんです。私が迷ってるときも「自分の思う方で決めてください」って言われて、ええ。「だって時代は変わるんだもん」って言われました。素敵な女性です。

で、最後に子どもの笑い声が響くまちにすること。高齢者が生活しやすいまちにするってい

うだけではないですね。そこに子どもの笑い声がなければまちとは言えない、と私は思います。子どもの笑い声がなければ、死んだまちになってしまうと思います。あのごちゃごちゃいらんことも言いましたけど、以上をもちまして私たちの「NPOまちのエキスパネット」の活動紹介を終わりたいと思います。ありがとうございます。

司会：内容豊かなご報告をたいへんありがとうございました。先ほどの報告後と同じく約30分、質疑応答の時間を予定しておりますので、どなたからでも、手を挙げて質問して下さると、ありがたいと思います。

<中高生の居場所>

質問者5：私も3年ほど東京にいたときに、大学の発達相談室で障がいのある子どもたちの相談を受けていたんですけれども。私が診ていたのは、主に後発性発達障がい、自閉症とかLDのお子さんたちだったんですが、今日のお話を聞いて、やはりもっといろんな居場所があっただけいいと思いました。問題は中高生の居場所ですね。やはり小学校までは手厚く待遇されて居場所もあるんですけど、中高生になると居場所が無くなって、社会からドロップアウトしてしまうことが多々ありました。他人から認められる、他人の役に立つてことによる他者承認は、とくに中学生以降、自分づくりと重なって大事だと思います。また仲間づくりという点でもいえると思うんですが、高蔵寺ニュータウンの障がいのある子たちもそうですし、障がいの無い中高生から、まあ大学生までくらいの居場所とか活動とか何かあれば教えていただきたいです。

治郎丸：はい。非常にタイムリーな質問ありがとうございます。私たちも同様のことを思っていて。先ほど言いましたように、やっぱり18歳を過ぎると急に社会に出なきゃいけないんです。助走期間が長く必要な子どもたちなのに、助走期間が無いんですね。いきなり仕事しなきゃいけないんです。それで、今3つ目の児童デイサービスをつくったんです。それが、今年の6月にこないだ開所したばかりの、中高生のための

デイサービスです。それは、就労するための児童デイサービスって認可を受けていて、その子たちが社会に出るための助走の期間としてつくったものです。養護学校の親などは、とくに子どもが小学生のうちは焦るんですけども、中学生、高校生くらいになると学校が何とかしてくれるだろうと思うようなところがあります。あの、養護学校って就職率一応100%で、どこかには行けるようになっているんです、今は。で、親も、どっか行けるからよいわって言われるんですね。ところが、その後続けられなくて辞めてしまうんです。何も助走期間がないからですね。それで、親の意識改革っていうのも必要だと思っています。

とくに愛知県コロニーという大きな施設があって、小学校からもう本当に手厚くて、病院や養護学校、入所施設まであったので、中高生の居場所が必要だという意識が無かったのです。ところが、今、法がすごく変わって、行政はすぐに地域に地域にと行ってきます。入所するところはないし、コロニーも縮小するんだと言われて、みんなもう慌ててる状態ですね。慌ててるのに、でも、意識は変わっていないんですね。ですから活動としてはまず、児童デイサービスを利用したり、そういった余暇活動の中で就労の勉強をしよう、電車に乗ろう、バスに乗ろう、地域を歩こうってことを、今、一番やっています。

<地域と大学、学生との関係>

出席者6：治郎丸さんのお話を聞くのを、すごく楽しみにしていました。

治郎丸：ありがとうございます。

出席者6：お二人の報告者に是非お聞ききしたいなと思ったのは、例えば大学とか学生とかとの関わりって、ご自身の活動の中でどういった意味があるんだろうかということです。大学側から見ると、そういうことに関わるという時は、地域貢献という言葉で語られやすいんですが、今、治郎丸さんのお話にあったように、むしろ障がいを持つ人たちが、教育の中でその特性を発揮して貢献するってことも可能じゃないかというふうに考えています。実は、私どもはそう

いう取り組みに共感された方と一緒に進めているんです。例えば、学生が障がいを持つ方とか、障がい児に何かをするということではなくて、実際に見ていると、障がいを持つ子どもさんとか障がい児を持つ大人が、学生を教育してくださっている。そしてそういう中でインクルージョンみたいなことを学んでいるという側面が多いと思いますし、就労という中に、例えば夢かもしれませんが、障がい児、障がい者が教育に関与してゆく可能性とかは無いのかなとか、思います。大学という場所は、実は障がい者の就労にきわめて適しているところではないかというふうに考えたりするんです。あの、そうした目で見るということはどう思われるのかとか、その辺りのことを聞きたいなというふうに思います。

治郎丸：そうですね、実は私たちも夏休みとかを利用して学生さんたちに活動に入ってもらってるんですけども、勉強するって言うよりは、「まず勉強、学校で勉強したこと置いてきてね」って最初に言います。「何にも考えないでいいから子どもと一緒に遊んでください」っていうんですね。「で、その後に何を感じたか教えて」っていうふうに、「私たちにあなたたちがわかったことを教えて」っていうふうにいつも言うんです。私たちがやってることって、言葉では障がい児を支援するとかって言ってますけど、実は子どもに、「あなたたちのことわからないもんだから教えてよ」って一生懸命問いかけてるんですね。その連続なんです。学生さんたちにもあの、「貢献するとかって言うよりも、まず人としていろんな子どもがいて、いろんなコミュニケーションの方法があって、いろんな人が世の中にいるのだから、その中で子どもってとくに如実にそれを出すので、まずあなたたち社会に出るわけだから子どもたちと一緒にいると学べるよ」みたいな感じで機会を提供しているんですね。ボランティアに来てとは、決して助けてとかではなくて、もう生きた教材じゃないけど先生がいるからどうぞ教えてもらって、みたいな感じで来てもらうので、今言われた質問というのがちょっと私、感覚的には、わかるんですけど、社会貢献に入るっていう

か、なんだろうな。せっかくそういう場所があるので、良い機会…？ 難しいですね。なんて言ったらいいんでしょう。

出席者6：学生っていうのは地域に居つく存在ではないですね。だからそういう意味では、4年間大学にいてそれぞれの地域に帰っていく。あるいは東京の大学でも半数くらいでしょうかね、残るのは。半数いないかもしれませんね。そうした中で「まちづくり」という観点から見ると、学生って言うのはそのまちに居つくわけでは無いですが、そのなかで障がい児者と交流するということがどういう意味を持つかなという、むしろ障がいをお持ちの方々の方が教育に入ってこられて、教育に貢献していると言えますし、別の見方をすると教育に対してすごいリソースをね、発揮されてると個人的に思うんですね。

治郎丸：うーん、言われてることはすごくわかるけど、私たちはそういった角度では子どもたちを見ることはできないです。

出席者6：わかりました。ありがとうございます。

司会：学生に、「じゃあ、大学で教わったことは置いてきてね」っていうのは名言だと思うんですね。その後で学生たちが、見たこと、わかったことを言い残すことがありますか。

<人間だもの、お互いにわからないことがいっぱいある>

治郎丸：「普通だった」って言われます。何考えてるかわからないし、何でこっち向いてくれるかわからなかったけども、2ヶ月一緒に過ごしたら、わかったって言われました。私は、「じゃあ学校で教わったそっちを、今度は私に教えてよ」って言って、交換条件で教えてもらいます。難しい言葉でいうと、こういうふうなんだなって。両方必要なんだなあって。

司会：現場から出た言葉と、それを分析する言葉と、両方が必要っていうことですか。

治郎丸：そうですね。であの、今、学生さんが大学に通いながらうちでアルバイトしてます。学校と現場と両方やってわかりたいからって来られてるんですけど、でもこれなんかは、なん

かダメなんですよね。なんでかっていうと、「学校で教わったことを試したい」って言われます。で、「こういうふうにしたからどういう成果が出るか、やらしてください」っていうの。私は「それはノー」っていうんですね。

学生は、「図書館にこういう機械があるのをつきとめたんだけど、この機械を使って子どもたちになんかやらせたら」とかって言う。最新の機械がどうのこうのとか、それは、この研究のここにあたるかって言うんですけど。私は「あのね」って、「この子はバスの乗り方わからないの。で、切符の買い方知らないの。100円の価値を知らないのよ。そこもってきてDVD使ってこれやって、あれやってなんて、それあなたたちの夏休みのカリキュラムなの？」って言うのは、と膝をたたいて、「社会の中で一緒に住んできて、1人で切符を買うことが幸せなんだって知らなかった」って、言うの。だから「いつも答えがあることはいらなくて、ちょっと自分で触って、接してね、遊んでね。私たちがひょっとしてわからないことも教えてくれたり、なんか宝の言葉が出てくるよ」って言ってます。学生さんは勉強しに来てますし、私たちも実際助かってますけれども、そうじゃなくて、「本当は、お互いに補完し合ってる」と思いますので、それを貢献してるとか支え合うって言葉じゃなくて。学生は先に聞いてくるんですよ、必ず。「こうしたら、どうしたらいいですか」って。「さあ」って、答を言わないんですね。だって人によって違うじゃない。「あなた、発達障がい児のアスペルガーだったらこういう反応するだろうって習ってきたでしょう。それって10人が10人しないわよ」って、言うんですね。本当しなかった。だって人間だもん。わかんないこといっぱいあんだから、って言うのと、学生さんたちはまた来てくれる。またこう楽しいこと教えてくれるんだ、とか、そういった感じにずっとなりたいなって、いつも思っておりますけれどもね。学生さんたちは卒業したらどこか行くかもしれないけれど、どこかへ行ったら必ずそのどこかで力を発揮してくれると思うんですね。また何年かして、「あのとき言われた言葉、忘れません」って言われたら、ものすごく

嬉しいですよ。私、それで良いと思うんですよ。必ずしも地域に還元しなくても、まわりまわって、いろいろなところでいってあげれば良い、と思っているので、学生さんたちは宝だと思えますね。だから宝の言葉をあっちこっちの地域で、こう投げかけてもらうのが、学生さんたちの仕事じゃないですかね。もういろんなことができる。本当に、私たちではできない宝物だと思えますね。

司会：それぞれの立場から報告を受け止めた質問と、さらにその応答とが続いております。はい、次の方どうぞ。

<地域性、専門性>

出席者7：失礼します。今日は本当にいろいろお話ありがとうございました。私も1970年代から、障がい者の親御さんたちと一緒にいろいろ教室をやってきて、その当時のお母さんにまた会えたような感じがします。すごいエネルギーだったですね。障がい児教育も含めて、あの1970年代っていうのは。脳性麻痺の方が地域に出て行った時代だったのですが、地域化していくその時代に出会ったお母さん方と今、改めて出会えたって感じです。私たちのNPOは子ども、障がい、ジェンダーという3つの視点でやっています。児童デイコロボックルという、2歳から8歳までの、幼児と学童を貫いた療育支援と心理相談室。それから1対1の学習塾。また親子塾という、勉強が苦手な子どもたちの支援。スプリング授業という、いろんなハンディを持ったり、いろんな自己表現をしたい人たちの地域の発表の場というか、ギャラリーという、4つの事業をやっております。それでまず質問します。私は地域性という問題と専門性というのは、実は非常に対立する概念だとつねづね思っていて。で、地域性ということと専門性ということをいかに結合させていくかっていうのは、民間の力でないと無理だと思います。我々の療育は心理士を含めて作業療法士を入れてやっています。それで地域性と専門性というものを高蔵寺ニュータウンでの取り組みの中で、何か感じられたことがあったら、1点でもご紹介いただけたらなあと思います。

<まちづくりと子ども支援>

出席者7：2つ目の質問ですが、今回震災があったときに、私はおもちゃ支援というか子ども支援を始めて、おもちゃを集めて被災地の方に送りました。これは単におもちゃを送るってことじゃなくて。避難所には、子ども問題を担当する方がきつとないだろう、という確信がありました。というのは、まちづくりといった組織、いわゆる共同体をつくっていくとき、最後になるのが子ども問題です。再来週も福島の方におもちゃを届けるんですけど、まちづくりをするときにですね、子ども問題抜きにまちをつくったら駄目だというような思いがすごくあるんですね。責任なき権利を持つ唯一の存在なんですよ、子どもは。それを包み込む社会が無いとだめですね。そうでないと、まちづくりも子ども支援も、きっとまた阪神大震災のときにように消えていく。今回はそういうことは絶対にできないくらい深刻な問題だと思いましたので、支援していったのですが、おそらくそういうまちづくりと子ども支援というところの繋ぎをですね、いろいろやられていると思いましたので、その辺りも、参考になることがあったら教えていただきたいなあということで、よろしく願いします。

治郎丸：はい。難しい質問ですけども、地域性と専門性の関わりっていうところは。私たち事業では、専門家が自分たちが親だったら受けたい療育をつくりたいっていうか、つくりたいものをつくってる、っていう感じです。すごく専門性が高いところでやりたいんです。子どものときが一番、大人の素、社会性の素をつくるわけですから、そこはどうしても一生懸命力を入れてやりたい。やってるんですけど、大人になったときの環境っていうのは99%くらい、周り是一般の人なんですよ。一番いい療育でその子に関わってくれる人なんて、地域には誰もいないんですよ。容赦なく、だめだめだめって言うてるんですよ。でそういうのに耐えうる子どもにも育てなきゃいけないもんですから、専門性と地域性っていうのは両方必要で、専門性は子どもの人格を形成するのに必ず必要なものなので、早ければ早いほどいい。療育は、大

人になるまでの、思春期を越えたところまでは必ず専門家の人がナビをしていきたいっていうのがあって、そこまでは私たち一生懸命やるんですけど、ところがその後は何も無いですよ。何も無いところに放り出されるわけですから、そのときのためにいつもずっとこう守られたところにいるんじゃないくて、そこへ学生さんを入れる、夏休みには一般の人に見てもらってというようなことが必要になってくるんですね。だから私たちも障がい福祉にとってまちづくりがなぜ必要だったかって言うと、今言われたところに意味がとってもあって、専門性は子どもたちに不可欠なんですけども地域性って言うのもまちに住んでいく以上同じように不可欠。ただ必要な時期が違うってということだけなんですよ。地域性を取り入れていくように必要な期間を見てとって、むしろかわいい子どもの時期に移行させたいと思います。子どものうちに、療育の観点ではない、地域の人たちと接触をもち、経験を深めてやるのが、子育ての地域性の重要なところ。大人になってから急にまちの中にはぼんって入れて「変わった人だけどよろしくね」っていうのは地域の人受け入れが悪いですよ。そうじゃなくて、子どもの頃から地域の人や学生さんに関わらせてお互いに知る。難しいこと抜きにして先ほどみたいに、触れ合うとか知るとか。知ってるよって意味において、時期をずらして地域へ入る、地域性を知るということは、必要な支援だなという感じでしょうかね。

<ていねいな子育て>

あと震災のまちづくりと子ども支援ということで、これは今のとすごく似てます。障がい児の支援だからといって、特別とは私たちは思っなくて、障がい児の子育てをなんて呼んでるかかって言うと、「ていねいな子育て」って言うてるんですね。それはなぜかという、児童デイサービスの未就園のクラスっていうのは、告知されてないお母さんが通われるんです。1歳とか2歳とか。検診に行って、なんかおかしいんじゃないか、なんか変じゃないか、ちょっとドクターのところに相談にいったら、

って言われる。その時点でデイに来られるのですが、ドクターしか告知ができないものですから、相談を受けに行ったり検診の場所では、お宅の子は自閉症ですねとは言われないんですね。お母さんたち、そこですぐに行けばいいですけども、6ヶ月、1年くらいすぐ経ってしまうんです。子どもが大きくなって育っちゃうんですね。そこで、もっと早く行かせてよって思うんですよ。児童デイサービスっていう療育の民間でもできるところとかあるので、やっとお母さんはそこに来るわけです。遠回りして遠回りして、ここに通えば普通の子どもになるかもしれない、と、多くの告知されていないお母さんが療育に来られます。私たちは「障がい児」という言葉を使わないようにしているんですね。いきなり母親が鬱になったり、いろいろあるものですから。親の支援も同時にしていかななくてはならない。そこらへん、微妙な支援をしなきゃいけないんですが、「お母さん、ていねいな子育てをするんだよ」と説明します。そういった意味においては子育て支援も障がい児と同じで、子どもが思春期を通り抜け大人になって社会人になるわけですから、まちの中に子育て支援が無いのは未来が無いということになります。それは地域の未来が無いっていうのとイコールだと思ってますね。そういう認識です。

司会：質問をお待ちになっている方、お待たせしてすみませんでした。どうぞ。

<父親の参加>

出席者8：私は宇治市で「子育てを楽しむ父親の会パパロ」っていうお父さんの加入するグループをやっています。僕自身の子どもは9歳の娘なんですけれども、アスペルガーなんです。で、その障がいとは関係なしに、普通の子育てを通してお父さんたちの会ってやってるんですけど、あの、先ほど障がいのある子どもは就職が困難って話をされてたんですけども、確かにそうです。それ以外にも、普通の健常な子どもたちでも、今、働くってことが結構大変になってきてますよね。フリーターとか、就労についての感覚が変わってきてると思うんですよ。で、お父さんが子育てに関わることで、何か改

善できないかなってというのが、会の一つの取り組みなんです。まあ社会を知ってるお父さんから、子どもたちに社会性を何か伝えていけなかなということやってるんですが。先ほど、旦那さんの話も出たんですけども、実際、子育て中のお父さんというのが、今されている活動にどういう形で関わっておられるか、っていうのをちょっと聞きたいです。

治郎丸：これが一番高いハードルなんですね。なんとかして私たちがやってることを見せていこうというのが、実は私たちの裏の課題なんです。とにかく褒めるんですね。「あなたこれやってくれて良かったわ、子ども大喜び」みたいな感じですよ。「これやったら本当に大変だったけど、お父さんが手伝ってくれて嬉しかったわ」ってことを繰り返し言っていくしかないんです。どこのお母さんにとってもそれが一番のハードルみたいです。私も47歳なんですけれども、事務局長が10歳下なんですね。彼女はご主人と、当たり前のように「日曜日も仕事だから、子ども見てね」っていうような会話をしているんですけども、私は、子どもはお母さんが育てるといふ発想が多い世代なものですから、羨ましくてしょうがないんです。お父さんに関わらせるために、ひたすらお父さんの仕事をつくらせてあげるといふ事に徹しています。地域の中や、子ども関連のことです。お父さんって光が当たる機会が少ないんじゃないですか・・・あ、失礼いたしますね（笑）。ごめんなさい。多くのお父さんたちに謝ります。でも、光が当たってませんよね。

出席者8：確かにそうです。

治郎丸：光が当たってませんので、そこに注目して、彼らを主役とするイベントを行って行きます。なので、私達のイベント参加者の90%くらい、男性なんです。彼らは、光が当たると働いてくれるんです。イベント以外でも手伝ってくれるんですよ。「実はお店出すんだわ、手伝って！」と言えばこぞって手伝ってくれる。「あなたギターうまいじゃない。すごい知らなかったー。子どもと一緒にやったらいいんじゃない」って言われてやると、張り切って取り組みます。まあ、徐々に練習して上手くなってい

くんですがね。男性を地域に参加させるって、大変なんですけど、楽しいことやったら参加してくれるんじゃないかって思います。お父さんたちにフォークジャンボリーのたび、毎回、光を当てて、とにかくスターにしてあげると、見に来た家族は大喜びですよ。お父さん、大喜びですよ。家に居場所できますよね。協力してくれますよね。やっと最近13年目にして、「お前たちいろんなことやってるな」と理解してくれるようになりました。時間をかけてあきらめずに、褒めることかなあと。これはうちのスタッフ事情です。

質問者8：そこらへんは、先ほどおっしゃっていた若い世代の人たちと違いますよね。

治郎丸：若い世代の人たちは、リストラ、派遣切り、労働時間短縮にあってます。今までずっと夜遅くまで働いてたのが5時に帰っていいと言われて、すごく給料が減ったそうです。うちの半分くらいのスタッフがそうで、だからお母さん働いてよってということで、もうとにかくこのニュータウンのお母さんも働いてるんですね。土日もひよっとしたら働かなきゃならないって状況になってます。その下の30代の世代がまたちょっと違って、今イクメン流行りで、お父さんも育児参加が当たり前というふうな風潮がある。お父さんたちを引き入れるっていうのは、本当にそれぞれの努力しかないかなと、今のところ思ってますが。はい。

出席者8：はい。わかりました。

治郎丸：答えになっていたか、どうかわかりませんが。

司会：次の方どうぞ。

出席者9：今日はありがとうございました。大変に参考になるお話ばかりでした。私たちはですね、夫婦です。発達障がい児の支援の会を立ち上げてやってまして、発達障がいのことを地域に理解してもらおうということの一つの大きな目標に掲げてるんですけども。今までは、冊子を出すとかイベントをすとか、皆さんわかってちょうだいよみたいな感じのことばかりしていたんですけども、今日のお話を聞いて、そうではなくって、まちづくりというところに入っていかないといけないのかと。もしかした

らってというか、その方が、それこそ本当に顔の見える、すぐそこにいる理解者が増えていくのかということをお話していただきましてですね、明日から頑張りたいと思います。

治郎丸：嬉しいです。仲間が増えました。

出席者9：今日からですね。

治郎丸：嬉しいです。

<母子分離と社会性について>

出席者9：お聞きしたいのはですね、ちょっとだいたい話が戻りますけど、あの、障がい児のお母さんたちって、どうしてもなんて言うんですかね、なかなか母子分離ができないというか、手放せないと言うか。ちょっとうまいこと言えないんですけども、いろんなところに私がなんとかしなければ、私がこうしなければって、ついつい入っていっちゃいますよね。小さいときはそれでいいんですけども、もう小学校1年2年3年くらいになってくると、果たしてそれはこの子にとっていいのかどうかということ、今非常に悩んでまして。先ほど養護学校の話にもありましたが、そんなに苦労してまで行かなくてもいいじゃないかみたいなね。就労とかでなく、まあ塾とか学校とか、いろんな場所において、上手くいなくてこの子が苦労するんだったら、じゃあもうやめちゃおうみたいなことにもなるわけですよ。そういう判断というか、そこはどうされているのかな。あとお母さんがどんどんスポイルしてってしまうっていうのを、他のお母さんたちはどうされてるのか、教えていただきたいと思います。

治郎丸：そうですね。親だもんだから、かわいがればかわいがるほど自分は一生懸命やっていると思い込んでるんですけども、実は子どもの社会性をどんどん無くすお手伝いをしているんですよ。うちの子は中学2年生なんですけれども、ダウン症なのでちょっと小ちゃくて、未だにバイキンマンと一緒に寝てるのですが、本人もおかしいのはわかって、外ではそんなの知らんぷりするんです。家に帰るとアンパンマンのDVDを持ってきて、人がいると、もう少し違うテレビを見たりします。でもアンパンマンのアニメが好きなんですよ。

トイレに入ったらちゃんと閉めてやらないといけないのに、公共施設なのにちょこっと開けてトイレさせる母さんもいてみえるんです。それはその子にとったら物が言えないけど恥ずかしいと思っているはずなんですよね。でも言えないからよいわってことで、開けたままということがあって、でも親は気かけない。私もちょっとバカ親なところあって、こんなこと言いつつも起きてるときは小さい子扱いしないように、昼間は一生懸命やってる。でも寝顔見るとあまりにかわいいもんですからチューしちゃうんです。それもやめなければって思う。子離れが親にとっては一番の問題ですね。たぶん親が一番、子どもの社会性を無くしてるんじゃないかな。自分でもそう思います。できるだけそれを話題にするようにしたいですね。そのくせに自分が死んだらこの子はどうなるのって、手前勝手なこと言ってるんですね。そしたらちゃんと社会に自分がいなくても、生きていけるような仕組みをつくるとか、意識をつくるとかいうことをしなければならいんです。アスペルガーだったらやっぱり知的には能力が高いので、いろんなこと感じる力があるから余計そうですよ。言わなくてもものすごく感じていることがたくさんあって、なので親はつらいけど、そこは言わない。

かわいくても親が「何々ちゃん」とか呼ばないで、「さん」って呼ぶと、よその人も「ちゃん」って言わないんですよ。例えば名前がタイラなんで、自分をたいちゃん、たいちゃんって呼んでるんですけど、それを「タイラさん」と呼んでみたんですよ。そしたら相手する人も「タイラさん」って呼んでくれるんです。呼び方が変わると、意識が変わって、ちょっと大きい子扱いして、タイラさんここに座りますかって、敬語なんですよ、「さん」がついてるもんですから。「タイラさん座る？」とは言わないんですよ。そういった意味で周りの意識もちょっと変わるっていう、そういったことを心がけていって、話題にして伝えていってます。

司会：もうお1人だけ、直接ご質問なさりたい方ありますか。

出席者10：障がいのある方の特性を社会の中で

生かすために伝えていくっていうときに、やっぱり直接関わりがないと難しいですね。おそらくまちづくりのなかでも来ない人呼び寄せる仕組みをいろいろ工夫なさっていると思うんですけれども。楽しさを共有するってところでお話いただいたかもしれませんが、さらにもう少し何かあれば是非お聞かせいただきたいなと。

<建物の外へ>

治郎丸：そうですね。そのためにまちづくりイベントを外でやってるんですよ。建物の中は意識がなきゃ入らないんですけども、外だと、通りがかりの人も見てくれるので、いつも外なんです。私、だから日焼けしてるんですけど。団地の中で高齢者の人たちのアンケートを取るのも、外で取るんですよ。今日はアンケートやるから来たら飴もらえるよとか。なんかちょっとそんな感じで、イベント的にやっています。50名先着ティッシュ1箱プレゼントとかやりながら、そこに障がいのある子どもたちがいたりするんですよ。どんな場所でも必ず連れてゆきます。とくに障がい児だからっていう紹介はなしです。これ渡してね、と頼んで役目をつけます。挨拶しかしない子もいるんですけど、でも大きな声なんです。誰より大きな声の子がいて、その子が営業で座ってたら感じいいですよ。営業係です。こうして、子どもたちを外に連れて行っています。

<悩みを希望に逆転させるまちづくり>

司会：では、時間がきましたので、つきない話しの続きは懇親会に持ち込むことにしましょう。その前にここで、第一報告者から第二報告者へ、第二報告から第一報告者へ、お互いの報告について、一言お願いします。

楓原：私も地域づくり、っていうところから治郎丸さんのお話をすごく楽しみにしていて、すごくお話が上手で楽しかったなあと思います。これは今日の印象としまして、とくに治郎丸さんへってことではないのですが、皆さんやっぱり学問として学んでらっしゃるので、外国人とか、日本人とか、障がいがあるないっていう括りで人を見られてるんですけど、もっと違う

括りがあるんじゃないかなということです。治郎丸さんがさっき「ていねいな子育て」っておっしゃったんですけど、私も、障がいがあるのではないではなくて、この人ははにかみやさんの人、恥ずかしがりやの人って。ブラジルの人でも人前で話すのが嫌っていう人もいますね。だから日本語がわかる人、わからない人ではなくて、この人は本当に恥ずかしがりやな人、この人はすごく陽気な人、っていうふうな見方で、人をもうひとまわり違うくくりで見たらいいのかな。あんまり専門的で一方的なくくりだけでは、人間ちょっと解決できないんじゃないかなって、今日の質問や議論を聞いて思いました。

司会：おっしゃるとおりで、私たちも括って分類して、それでわかったつもりで終わる研究ではだめだと痛感しつつ、苦闘しております。じゃあ治郎丸さんから、一言。

治郎丸：第1報告は非常にパワフルでした。誰もがすすんで取り組もうとしないような本当に深刻な問題をとりあげ、解決してゆくのは、きっとものすごく大変だったと思います。私たちは問題を解決してゆくというより、仕掛けては結果をふやしていく感じなんです。保見国際交流センターのような取り組みには、私たちまだ踏み込んだことがないんですね。だからお近くで、同じ愛知県なのが心強くて、とても嬉しくて、相談する先ができたなと思います。よろしくお願いいたします。

司会：大学もまた地域の一部として、生まれ、生長し、そして行き悩むこともしばしばですが、お二人の報告はそれぞれ悩みをバネにし、悩みを希望に逆転させるまちづくりというところが共通していたと思います。ありがとうございました。ではお二人にもう一度、拍手を。

<了>